

が、何の異状も故障も認めなかつたので、「唯だ、悪夢に襲はれたのです。全くの幻覺に過ぎません」と明言し、そして「二度とそんな事を考へない方が良い。数日の後には貴方がたお二人で莫迦氣た恐怖を笑ひなさるでせう」と言つて歸つた。

翌日もこの青年は多少氣分が悪いとて再び醫師を呼びにやつた。醫師は唯だ彼等母子の無意味な恐怖心を嗤ふのみであつた。

三日目に病人の容體は本當に險惡な状態に陥つた。醫師はこの時始めて虫様垂炎と診斷した、そして手術を施されて二日後に、彼は遂に亡き人の數に入つた。この幻影と死の實現との間には五日しか経たなかつたのである』

人々は恚うした話を聴くと、この不思議な事實を單に「幻覺」とか「錯覺」と云ふ言葉で手軽に片付けて了ふ癖がある。彼等は可い加減に押さへつけて置いて、それで問題の解決がついたと考へて居る。如何にも幼稚な事である。

予は茲に、既に蒐集して置いた無數の研究資料に、更に新たに得た種々の珍奇な現象を加へて、そして吾人のこれから探究すべき未知の世界の範圍を示さなければならぬ。次に掲ぐるのは前の例とは全く趣きを異にした、而かも同じ様に不可思議な事實であつて、一九〇〇年九月二十二日コンスタ

ンチノーブルから寄せられたものである。

第九四三信

『足下、多年民衆教育の向上に多大の時間を捧げて、忠實に従事して居られる貴方の科學的御研究に對して敬意を表し、且つ自分の經驗した二つの事實を御報告するのが私の義務と存じます。

私の縁戚に當る或る紳士が、ある日コンスタンチノーブルの私の家で、「何となくゼネバにゐる叔母が死んだ様な氣がしてならない」と私に申しました。それは朝の十一時でした。私は「叔母さんは常から病氣なのか」と尋ねますと、「彼女は十年も前にその家族と口論の擧句、別れてゐた筈だが、それ以來音信不通だ」と言ひました。それで私は、彼の懸念が何の意味もない妄想だと打消して、お互にその事に就て話し合つて居ると、彼の家の召使がゼネバからの電報を持て彼を尋ねて來ました。それには叔母が今朝七時に死んだとありました。

矢張り、この紳士ですが、去る七月三十一日の夜、突然何かに驚いて眼を醒し、妻に向て「伊太利王が殺された」と語りました。

妻は勿論それは夢でも見てゐるのだと思つてゐたので、夫の言葉に何の答へもしなかつた相です。翌朝、妻はその夢の事を夫に告げますと、彼は、「それは夢ではない。本當に自分が言つたの

だが、併し何ういふ原因から言つたのか自分でも分らない」と答へました。

その時、彼は窓口から港を眺めて、「警察船が皆旗を揚げてゐる所を見ると、伊太利王が薨去されたのぢやない」と妻に語りました。

それから一時間後に、彼は再び窓の所へ来て港内を見渡すと、警察船はすべて半旗を掲げてゐたので、彼は驚いて引返して来て、「ハンバード王が昨晚暗殺された事は矢張本當だ」と妻に告げました。彼は自分乍らこの奇しき暗合にすっかり驚いてしまつて、豫て精神病を研究してゐた私を訪ねて来て診察を求めたのです。私は種々彼を試して見て、毫も腦の故障を認めないし、またその徴候さへ分らないのでその旨を答へて歸しました。特に本人はすべての點に於て平衡の保たれた、そして、充分信用の出来る人です。

一面識もない貴方に直接御報告する事は失禮と存じますが、不惡御諒察を願ひます。

伊太利王立病院精神病醫

エル、ムー、デリー』

この手紙から、多少相異の點はあるが、極めて類似した隔感的現象の二つの例を得た。第一にコンスタンチノープルからゼネバまでは随分遠く隔つてゐる。而かも覺醒中に叔母の死を認めた事。第二には伊太利王の暗殺されたのを知つた事。この二者に對する説明は同一であらうか。第一例に於て

は、恐らく叔母と甥との間に特殊の流れが通つてゐたのであつて、第二例の場合には所謂一般の球狀波に依て傳達されたものと思はれる。だが、これを決定する事は困難である。何故かと云ふと、予は多數の例に向この面白い例を加へる事を得たに就ては博士に感謝するのである。何人もこれ等の事實を否定する權利はあるまい。そして斯かる明確な事例をさへ幻覺と見るならば、それは餘りに無感覺過ぎると言はねばなるまい。恰も正午に太陽の存在を否定するのと同様である。人類は吾々に取つてはまだまだ探索されない神秘である。實際、學校で教へる科學は、今日まで誤つた道を辿つて來た。眞に眞理を求むる者は、是れから發見され、決定され説明さるべき最も重大な靈魂といふもの、未知の力が、本當に存在する事を確信しなければならない。

吾人は虚心坦懷にすべての現象を研究すべきである。これが予の方針である。フランシスク、サーセーは、或日手相術に關する手紙を受取つたとて、それを予に示した。その手紙は一八九九年三月二十二日附のもので、大體次の様な文句であつた。(第八四一信)

「貴下の透徹した判斷や、貴下の發表された卓れた方法、及び編年史中に於て、世に與へられた懇切な御忠言に對し、私は何人にも遜らない敬意を表はすものであります。けれども何人も凡ゆる事を知り盡す事は出来ません。卓越した特色と云ふべき常識の持主たる貴下は最初不測不可究

なものと考へになつた事に尙没頭される様な事はあるまいと存じます。この點に於て彼の眞の科學的識見を有つてゐるフアマリオン氏とは全然正反對であります。彼は何事も検討しないで斥ける事をしません。

A. de M.]

この手紙の後には觀掌術に就ての議論を述べたてゐるのであるが、こゝには觀掌術の事は必要はない。唯だ予が特にこの文句を茲に轉載したにしても、それは吾々は何物を蔑視しない様に充分注意を拂ひ、そして何等の先入觀に妨げられる事なしに、本當に眞理であり、事實であるかを決定すべきであるといふ事を繰返して吾々の腦裏に呼び起さんが爲めである。サーサー氏は實に親切にも予にこの手紙を示して呉れた、それは彼はこれ等の現象を全く信じてゐないからである。

けれども、これ等の現象は數限りなくあつて、吾々には何うしてもそれを輕視する事は出来ない。精神の超自然的作用を論議し、立證する事は必ずしも容易な事ではない。次の書簡は一九二二年一月二十日、セツトから送られた例で、同時にこれは一般の人にそれ等の現象を理解せしむる爲めに、慫慂した珍らしい經驗を有つてゐる人々から、一般に募集した方が得策であるといふ事を予に勧めて呉れた物の一つである。(第二二二〇信)

『或る晩、私はセツトのグラン、カフェーを出る時、親友の一人はまだ中に残つてゐた。彼は大

元氣で、懸念すべき容子などは微塵も見えなかつた。それは丁度十二時であつた。私は極めて快い氣分で床に就いた。恰も何事にも安心しきつた人の寝るやうに、充分な休息を得やうと思ふ外には何の不安も、懸念もなく、ぐつすり寝込んで了つた。

午前三時頃、怖ろしい夢に驚されて眼を醒した。そして床の上に座つた。私はこの時、友人の頭蓋骨が開かれ、最後の息を引き取り乍ら私を抱擁して別れの言葉を告げてゐる所を夢に見たのである。兎に角、怖ろしい幻で、今もそれを明瞭に眼に浮べる事が出来る。私は恐怖の餘り、着物をつけ、馳て往來の人通りの賑さで氣を紛らし、あの恐ろしい夢魘を忘れやうと、只管、夜の明けるのを待ち侘びた。その朝七時、私が外出しやうとしてゐると、友人のテオーボンが、彼の友人を訪問中、何んな事情があつたのか分らないが、兎に角、ある事件の後、窓から飛下りて、頭蓋骨を碎いて即死したと云ふ知らせがあつた。

私は今も今とて昨夜の夢の印象がまざ／＼と残つてゐる折も折、符を合はした様なこの知らせを耳にした時は、何んとも言ひ様の無い愕きと怖れの爲めに、氣が遠くなつて、今にも氣絶する様な氣持がした。

吾が畏敬する偉大な學者である貴下に向て、私は事實以外の事は何も申し上げない。この話も事

實その儘で、些の偽りもないのである。

セツト町公會堂事務員

ルイ、ペリーエ』

吾々はこの幻影を何と解釋する。

陳述者の精神がその友の出來事を遠方から見たのであらうか。抑も亦、友自身が現はれてそれを示したのか。

吾々は遠い距離を隔てて視たと云ふ多くの實例を知つて居る。そこで自然第一の説明が起つて来る。

けれども、陳述者はその出來事を見なかつた。彼の眼に映じたものは唯だ頭蓋骨を碎かれて、息も絶え／＼になつてゐた友であつた。

併し、一方から考へると、若しその友が悲劇の瞬間に殺されたものとすれば、彼はこの時、恰も友の事を思つてゐたと想像することが出來まいか。

これは鳥渡考へると有り相もない事の様であるが、事實有り得る事である。友人が三時間前に彼と別れた許りであつた。兎に角、極めて複雑した問題である。

茲に妻がその夫の身に起つた椿事を、遠隔の他に在つて感知した顯著な例がある。これは「生ける

物の幻影」から轉載したもので、フィニステルのユヘルゴートの醫師オリヴィエ博士自身に關する話である。

「一八八一年十月十日、余の家から七哩許り離れた田舎に往診に行つた。夜は大ぶ更けて、その上暗夜であつた。予は薔薇の木で頭上にアーチを成してゐた四路を馬を驅つたのである。四隣は眞暗で、手綱の繰り様がないので、馬の進むに任かせて置いた。丁度九時であつた。突然、馬は四肢を辻らして、口端を地上に打ちつけた。同時に予は馬の頭を越えて向ふ側に投げ出されたのである。その時予は肩骨を碎いた。

この瞬間、家では妻が衣物を脱いで、寢床に就かうとした時であつた。彼女は何事か予の身に起つたと云ふ感じが強烈に湧いて來た。今はもう、じつとして居る事が出來ない。彼女は慌しく下女を呼んで、「早くお出で、大變な事が主人の身に起つた。夫は死んだか、でなければ非常な怪我をしたのだ」と言つた。けれども予の行先が分らないので何うすることも出來なかつた。仕方なしに彼女は、下女を傍に置いて泣いてゐたと云ふ。予が家に着いたのは一時頃であつた。予は召使を呼んで燈火を持ち來らしめ、そして馬の鞍を解かせた。この時、予は「俺は怪我した。肩を動かさない」と言つた。

妻の豫感はこのに確められたのである。

フィニステールの醫

ア、オリヴィエ

予の蒐集した資料の中にも、之に類似した例、即ち所を異にして不幸や、出来事を感じた例が少なからずある。更に不思議なのは、實際の出来事よりも四十五分前に豫感した例もある。

茲に、人間の心靈の實在は物質に歸する事の出来ない、そして又、まだ研究の餘地のある心靈の力の作用と云ふ證據に依て明かにされた。人は今尙眞の性質を知らない。人には容易に測り得ない微妙な能力が賦與されてあつて、この能力が人間の進化につれて段々に發達して行く。つまり、古典學派は其進路を誤つて來たのである。

吾々は人體中に於て、單に最も顯著な、最も皮相的な、最も粗雑なものの計りを見、接觸し、解剖し、切開するに過ぎない。吾々はその内部に如何に玄妙極致な所があるかと云ふ事は今尙知らない。而もこの不可解な物こそ吾々の何うしても理解しなければならぬ物である。實驗的心靈の解剖は今日までの形而上學や、それを表はす諸言語に代るべきである。心靈に對する從來の似而非知識は、唯だ、言語の集積に過ぎなかつた。何世紀の間も吾々が満足させられて來た、そして實際何物も教へる所がなかつた單なる言語の下に、幾ばくの眞理が存するかを考へる時、吾々は何うしても今後の研究

方法を変へなければならぬと云ふ事を痛切に感じる。そこで、人間の心靈の力を検討する爲めには心靈の性能を顯示し、その實在を立證された凡らゆる實際的の觀察、次の如き逆説的諸現象の實相を出来る限り精確に考量しなければならない。

言語の交換なく、而も遠隔の地に作用する意思の力。

心靈の傳達——隔感。

精神に依る心的幻影——未來の豫幻。

死の瞬間——及び死後に於ける死の表示^{レ示}。

要するに多様な、而も各々獨立した凡ての觀察は、何れも人間内には物質感覺の本性と類を異にする能動的な心的元素の存在する事を立證して居るのである。

吾々は此處に、クリストファー、コロンブスが所謂西印度諸島に到達した發見した世界よりも更に新らしい宏大な世界に乘込まんとしてゐるのである。

催眠術を掛けられた者が、自分の少しも理解しない事を語る時、自分の嘗て知らない家を心で訪問する時、自分の關知した事のない問題を取扱ふ時、未知の國語を容易に話す時、言語に依らないで人の思想を聴取する時、遠隔せる人の思考してる事を感じする時、自己の心を遠方に送つて何も知らう

答もない場面を描寫する時、これ等は皆人間の單なる腦の作用であらうか。

吾々の判斷を物質的現象、又は古い生理學に基礎を置く事は斷然止めなければならぬ。だが、一般の人は詮索の價值のない科學を超越した問題にまで先き走りをしたがる傾向がある。吾々は全然未知の事柄に對しては飽くまでもそれを問題にして、何處までも理論の上に立脚して行く事を忘れてはならぬ。

一八六五年頃、磁針の狂ひと太陽の活動との間に何等かの關係があると云ふ意見を持つてゐたのは、佛蘭西では殆んど予一人であつた。天文學者等——中には彼のル、ヴェリエと同様に有名なフェイ氏もある——は予の説が誤つて居ると駁した。彼等は地上の磁氣の狂ひと太陽の活動とが觀測された時偶然に一致してゐたのだと思つたのである。更に物理學者等は「太陽に磁力が有らう筈はない。何故なら鐵棒の磁力は熱せられると無くなるからだ」とさへ公言してゐたのである。

けれども、太陽は六千五百度といふ極めて高い熱を有つてゐるに拘らず磁心である。そして、現在（一九一九年）では、太陽の各黒點の磁力を測定する方法さへ發見された。斯様に科學は變化して行くのである。吾々は何事にも眞理を認め得るに至る迄には前途は尙遠慮である。始終觀察を續けてゐると誰れでも外觀と實際との間の差異が分るものだ。予は今、次の古い記録を見付けた。それは一九

一七年十一月十三日に認めたものである。

『寒い冬の朝、太陽は赤く燃えてゐる。大氣は半ば透明な霧で鎖され、木々の枝には尙ほちらちら緑の葉を残してゐるが、あゝ美しい冬景色、萬物皆赤に黄に、そして赤裸々に。若し大氣の關係から太陽が常に斯く赤色に見えるものならば、吾々は、これが太陽の自然の色であると信じて居やう。誰も太陽の白きを見たものはない。凡て事理と云ふも、畢竟斯かる事に過ぎないのだ。吾々の印象は吾々の判斷の自然の基礎となるのである。』

予は怎んな色に太陽を見て、斯んな考へを浮べた事は今日まで百回にも及ぼう。これが吾々の凡ての感覺の眞理であらう。』

予が茲にこの記録を引用するに當つて思出されるのは、「若し大氣が實際よりも一層不透明であるか、或は常に雲で蔽はれてゐるとすれば、太陽でも、他の天體でも未だ見たものはなく、太陽系は依然未知のまゝであつたらう。そして人類は絶対に眞理に無智であつたらう」といふ事を五十年間に何遍となく繰返した事である。

吾々は異常に精神感應し易い人を何う觀るべきか。實際、この種の人には存外に多いのである。ゲーテとシューマンはその著しい典型と云つてもよい。予は後で二重人格の事を述べる時にゲーテの例に

就て語るが、茲にはシューマンの経験した珍らしい隔感的現象を擧げる。それは彼が一八三三年、クラウイークに寄せたものである。

「私の今受けた豫感に就て是非貴方に聽いて頂き度いのです。それは三月二十四日から二十七日迄の間私はある作曲に耽つてゐましたが、その間始終私につき纏つて離れませんでした。

私は作曲の或る一節に鳥渡行詰つて居りますと、誰か後ろの方で、腹の底から出る様な聲で、「あゝ困つた」と私の言ふ事を繰返してゐる様に思はれるのです。その作曲中も私は、葬具や、棺や、絶望した人々の顔の幻を見ました。そして作曲が漸く完成してから、その題を何んとか附けたものと考へました。ふと心に浮んだのは葬送幻想曲と云ふのでした。自分乍ら途方もない題を撰んだものだと思ひましたが、何んとか悲しくなつて涙が出ました。それが何の爲めか自分にも分らなかつたのです。後で、テレゼの手紙を見て始めてそれと領うなづかれました。」

シューマンの義妹は、兄のエドワードが死んだ事を手紙で彼に知らせた。シューマンは初めの題を止めて「夜の曲」と改めた。

豫感は種々の形で現はれる。その例を一々引用する段になると、實際浩瀚な書物を成すであらう。茲に又、海峡の彼方に居る或る有名な婦人の経験した最も珍らしい一例がある。それは彼女がマイ

ヤ氏に告げた話である。

『私はまだ十六歳の少女の折で軽い麻疹に罹つた時の事です。その時分私は祖父母と一緒に住んでゐました。父母からもう入浴しても可いと言はれるので、私は飛び上らん許りに喜んで、すぐ浴室に行き、着物を脱いで、今、湯に足を入れやうとする途端に、「戸を開けて」と云ふ聲がしました。而もそれが男の聲であつたか、女の聲であつたか分りませんが、兎に角はつきり聞えました。そしてその聲が外からの様でもあり、私自身から出る様にも思はれるのです。私は驚いて邊りを見廻しましたが、勿論誰一人居りません。すると再び「戸を開けて」と聞えました。私は何となく薄氣味悪く感じて來ました。そして「自分の氣の狂ひか、さもなければ病氣に違ひない」と獨言を申しました。けれども、その時は少しも不快な氣分はしないのです。段々氣が落ち着くと、私はそんなものには頓着しまいと決心して、また湯に浸つてゐると、今度は三度目の同じ聲を聞いたのです。私は屹度四度目のが來るに違ひないと思ひ、遂に飛び出して戸を開けてやり、再び湯槽に入らうとする瞬間に私は氣を失つて湯の中に横に倒れました。幸ひにその近くの壁にベルの網がかゝつてゐたので、咄嗟の間にそれを掴むことが出来たのです。女中が參りました時は、私の頭は湯の中に浸つてゐたと申しました。彼女はすぐ私を引上げて湯室から連れ出す時、

私の頭が扉に打ちつけたので始めて正氣に回つたのです。若し扉が締つてゐたら私は確かにそのまゝ溺死したのでせう。』

實に不思議な事である。この聲は何んであつたか、一體何處から發せられたのか、恐らく自分がまだ慥かに病弱であると考へてゐたそのうら若い乙女自身からであつたらう。兎に角、恠うした譯の解らない警告は實に多種多様である。實際吾々人類の心靈は現代の科學では理解の出来ない能力を有つてゐるのである。

然り、吾々の物質的實在の中に隠れてゐる精神的知力は唯だ今日まで吾々の間に周知の幾つかの例の中に表はれてゐるだけで、これさへ近代諸學派の盲目的生理學的懷疑論に依て極めて無難作に説明されてゐるに過ぎない。こゝに亦、ジャンヌ、ダークの生涯に起つた面白い事件がある。

『ジャンヌが城に入らうとした時、彼女の惡口を吐いた兵士に向て「あゝ、お前さんは神を無視してゐる。自分の死が近づいてゐるのに」と語つた。その晩兵士は溺死した。

ある時、彼女はヴォオクールで、まだ一面識もないボードリクール郷の許へつか／＼進んで行つて、「私は自分の聲で貴方が此處に居る事を知つたのです」と言つた。

又、彼女がシニヨンで王に拜謁を許された時、王は宮臣の服裝をなして三百人の中央に居つた

が、ジャンヌはその中から直ぐ王を見分け出した。更に彼女は自分の使命を王に納得せじむる爲めに、特に個人謁見を乞ひ、王が既に獨りで神に捧げた無言の祈り——それは相續人の争ひに關する事であつた——をその儘王に復唱して王を驚かした。

チャールス、マルテルの槌がサン、カテリーヌ、ドフィルボアの教會に埋められてある事を彼女に告げたのも、オルレヤンで甚だしい疲勞の極、ベットに身を投げ出して、サンループ要塞の攻撃などは夢にも知らなかつた時、彼女を目覺ましたのも、一四二九年五月七日ツウルネル攻撃に投槍で傷けられると彼女に豫告したのも、皆彼女の所謂「自分の聲」であつた。

オルレヤンの包圍の際、彼女はグランダールに向ひ、「貴方は三日以内に一滴の血も失はないで死ぬでせう」と豫告した。事實、グランダーはツールネル占領の際、ロアル河に墜落して溺死した。』

彼女自身の聲——それは何處から來るのであらう。彼女自身から發せられるものと見るのが最も至當のやうである。だが、これ等の聲は眼に見えない世界に密接な關係を有つてゐるのだ。

ジャンヌ、ダークは慥に超自然的能力を與へられた敏感な人の罕れた典型である。けれども之に近い人は澤山ある。

これ等心靈の表現は、近頃漸く實驗と云ふ方法に依て研究され始めたに過ぎぬ。こゝに吾々はこの種の現象が殆んど實驗し得るものではなくて、唯だ觀察——吾々の研究の對象範圍を著しく狭める——を爲し得るのみであると云ふ事を再び言はねばならない。又、地球上に於ける有機體の生活狀態は極めて粗雑、不完全なもので、それは常に雲霧で蔽はれて居る國で天文の觀察を試みんとする人の立場と同様な立場に在るのだ。

心靈の問題も物質的存在の問題と同様に、凡ゆる問題の中で、最も興味あり、又最も重要なものである事は否定する譯には行かない。何故ならば、この問題は直接吾々自身に關する事で、吾人の内的性質を明かにし、吾人々類の不滅、絶滅を決する重大問題であるからである。だが、兎に角、地上に於ける吾人の不完全な生活條件は益々この問題の研究を妨げてゐるのである。

次章に於て吾々は心的幻影と未來の出來事に關する豫告的幻影の否定すべからざる實例を研究し、そして又心靈の相通作用に就て、充分に確めやうと思ふ。

未來を精確に豫知する事、或は何百哩、何千哩隔つてゐる所に現に起りつゝある出來事を實感する事は、これ位當てにならないものはないと同時に、又これ以上確かなものはない。

時とは何か、未來とは何うして作られるか。そこに吾々の注意すべき價值ある問題は無限に在る。

從てそれ等の解説が全部完成される事はない。けれども吾々の好奇心はそれは研究する事に依て不斷に新たにされて行くのである。平凡な日常生活は智的生物を満足さす事は出來ない。何故ならば彼等が智的に生活する事はつまり二重生活をする事だからである。けれども彼等は矢張思想に依て生活する事を欲してゐる。吾々は何處までも比較研究を續けて行かう。

コルシカ島のカスタに居るサベリーといふ學識ある教師から一九一二年に次の手紙を送られた。

(第二三〇信)

『これ等の問題が讀者に非常な興味を與へる事は勿論です。私は茲に讀者の爲めに自分の考へを述べ、又今迄の様に貴方の御教示を仰ぎ度いと思ひます。

時の性質といふ問題は、解決の極めて困難な事に違ひない。ある人が時の定義を或る有名な數學者に尋ねたら、その數學者は「外の事に就て語らう」とて答を避けた相です。けれども、私は更に疑ふ事の出來ない或る不可解な觀察に就てそれを貴方に報告するのが私の義務と存じます。

(一) 或る晩、私の父は友と一緒に歸宅の途中何處からとなく、婦人の泣き叫ぶ聲が聞えて來ました。父と友は屹度誰れか、殺害されたのだと想像したのです。そこで二人はその聲のしたと思はれる家の方へ行つて見ましたが、少しもそんな氣配もないので歸つて來ました。次の晩、同じ

家の前を通ると、前と同じ様な悲嘆の聲を聞きました。今度は本當でした。昨晚まで何の異状もなかつた小兒が晝から突然格魯布を患ひ、たつた今、死んだ許りの所でした。これは私の在動してゐる所の隣郡グイド、ハラソに起つた事です。

(二) 退役陸軍經理官ナボレオニ氏から次の様な經驗談を聴きました。

私共はある眞夜中、沈とした寂しい道を歸つて来る途中、二軒の離れた家の前に差しかかる、何か物を叩く様な音が正しく間をおいて聞えました。そして、その音が夜の沈黙を劈いて如何にも物凄く響くのです。二日の後、再びこの家の前を過ぎると、又前の様な音を聞きました。それは村の大工で、彼は昨晚死んだ羊飼の棺に釘を打つてゐたのでした。

(三) コスタのマラスピナ博士が、マツソニ山賊に殺戮された當日、私の叔父コスタ、ミケランゼローは、全身が痲痺してしまつて、恰度、眼に見えない手で掴まれた様になつた相でした。博士はこの叔父の伯父なのです。叔父はまだ存命してゐますが、當時(一八五〇年)はバスチャの中學校の生徒でありました。」

この三つの事件の中、最初の二つは豫感で、最後の一つは感覺に屬するものである。そして後者に就ては拙著ランコニー(アルス發行「未
知の世界」)中に數多の實例を載せて置いた。兎に角、現代の科學の力で

は、これ等の現象を説明する事が極めて困難であり、また、容易に得心出来ないものであるが、さりとて反駁する事も出来ない事實である。若し恚うした種々の現象を何處までも深く研究して行くならば、自分の性質にさへ無智な極めて幼稚である吾々は自身の意識に必ずや一閃の光明を與へられる機會に到達するであらうと信ずる。されば吾々は決してこの問題を輕視してはならぬ。

事實、吾々は無線電信の發見に依て、近頃漸く隔感的相通の事實を理解する様になつて來た。然かも豫感の現象に至つては、たとひそれが、一點疑ふの餘地なき事實であつても、尙且、今日、まだ説明の道がないのである。それは主として、吾々が茲にその絶對的の證明を有つてゐる未來の出來事の幻影と、吾々の自由意思の感覺との間に在ると思はれる矛盾撞着に因るのである。

今、姑くこれ等の特殊の問題に觸れずに、唯だ茲に原則的問題として、或る事情の下に未來の出來事が明瞭に見られ、精細に描寫せられるといふ事實は、今後も絶對に疑ふ事が出來ないと云ふ斷定を與へ、次に斯様な觀察の事實は自由意思と一致して行くべきもので、決して其處に矛盾撞着のあるべき筈はないと云ふ事を附け加へて置きたい。時間なるものは吾々の單純に考へる様なものではない。時間とはそれ自身に於て存在してゐるのではない。時間は永却である。不動である。不變である。常に現在である。羅馬法王レオ八世の近親に當る佛蘭西のある大僧正は、或る日子と共にナンシーの庭

國を散策中、この問題に就て予と議論した事があつた。彼は豫感^{予感}は自由意思と一致する事が出来ないと主張してゐた。

予は、「貴方は神の存在を信じますか」と彼に尋ねた。そして「貴方は恐らく神の存在を疑はない方と思ひます。貴方の先輩ヒツボの大僧正や、凡ての神學者はシセロと共に『神は未來を知つて居る』と云ふ事を信じますね」と念を押すと、彼は「如何にも確かに」と言ふ。再び、「貴方は自由意思を認め、基督教徒の責任を認めますね」と質すと、彼は「そうとも」と答へた。そこで、予は「然らば豫感的の事柄を認むる事はその教義と如何なる點に於て相違してゐるのですか」と反問したのである。

時に過去はなく未來もない。唯だ現在があるだけだ。然らば現在とは何時を指すのか。現在の時間か。さうではない。現在一瞬間の事か、それも當らない。そして一秒でも、十分の一秒でも、百分の一秒でもないのだ。百萬分の一秒すら電氣學者には随分長い時^{タイム}なのだ。唯だ、諸君がそれで可いと認むるなら、百萬分の一秒、それが現在^{プレゼント}であり、眞の現實である事になるのだ。けれども、諸君は尙それすら眞の現在と思つてはならぬ。

時はそれ自身に於て存在するのではない事は既に言つた通りである。時は唯だ、吾々の心靈の中に於て、吾々の感覺に依つてのみ測定されるものであるから、事件の連鎖は恰度絶えず展開して來る現

在の様なものである。併し、吾々はこの眼前の推移に注意する爲めに、何等人間の意思の自由な活動を妨げられる事はない。

けれども尙、非常に複雑した、そして極めて不思議な問題が依然として残つてゐる。この未來の幻影は特に第八章と第九章に於て證明しやうと思ふ。

予は茲に繰返して言ふが、吾々は唯だ自分等の住んで居る世界の皮相面だけを僅かに知つてゐるのみで、その内部實在に就ては殆んど推察さへ出来ないのである。事實、それ等の實在と吾々の心靈との間には今尙知られてない親和力、關係、交渉が在る。

予は本書の著述に關する書類や原稿の分類中に接手した私信を掲げて本章を結ぶ。發信者は今、土木技師長として知名な人で、佛蘭西天文學會の終身會員であり、豫て性格の立派な、頭腦の冷靜な何事にも公平無私な人として定評ある紳士である。

『貴方が未知の自然力に就て特に御熱心に研究されてゐる事を承知して居りますので、私は茲に何かの御參考とも思ひ、次の二つの事件を、何の説明も、註釋も加へずに、事實そのまゝを申し上げます。一つは昨日、他は一昨年起つた事で、何れも私自身に關するものですから私としては絶対に保證し得ると云ふ事に深い興味があるのです。』

第一の事件——私は豫て天文觀測用としてルロイ製の電氣時計を有つてゐますが、御承知の通りこの時計は電池裝置に依て四年間動くやうになつてゐて、電池の利く間は決して止まる事はありません。私の研究室にあつた此時計も今日迄三年半動いて來ましたが、その間一度も故障もなかつたのです。然るに昨日友人達が私の宅で、この時計の置いてない別な室で音楽を彈奏して居つた時、私は何氣なく自分の時計を見て十二時二十分であつた事に氣が付きしました。單にそれ丈なら何の不思議もないのですが、その瞬間、私は不圖、四年間は持續する事を保證されてゐた電池でも、もう二三ヶ月の壽命しかない様な、そして今の中電池を取換へて置かないと迎も最後迄保てさうにも思はれないと云ふ考へが腦に浮びました。私は何うしてこんな事を不意に考へたのか、自分乍らその原因が解りません。そして、それ以上時計の事は考へなかつたのです。半時間の後、友達が歸つたので、再び研究室に來て、暫く經てから電氣時計を見ると、正に十二時二十分で止まつてゐたのを發見した時は、私は餘りの不思議な符合に唯だ呆然として居りました。電池はまだ使用し盡されてないので、只振子を振るだけで元の様に動きました。繰返して申しますが、過去三年半の間、實際一度も止まつた事のない時計です。」

この出來事は吾々の心靈が現在未知のある力に依り、或る事柄を認知するものであると見るのが順當

であらう。さうでないと、觀察者自身がこの不思議な事件に不可解であると同様、恐らく予も觀察者以上に何等の説明は出來ないであらう。吾々は電氣時計の振子がばつたり停つた時、學識ある技師が無意識にこの現象に驚かされ、又無意識に自分の時計を眺めて、全く偶然にも電氣時計の事が頭に浮んだのだと想像する事も出来る。併し、事實さうではない。彼が感知したのは別の室であつた。到底振子の音など聞える筈はない。兎に角、電池がまだ効力を失はないのに時計が止まつたのは如何なる譯であらうか。塵の爲めか、乾燥のためか、抑も亦電氣の鈍つた爲めか、何等かの原因でなければならぬ。けれども、これ等の解釋ではまだ心靈的交渉を説明する事は出來ない。

『第二の事件——一年前の或る日、曉近い頃になつて、うとうとと兎角覺め勝ちな眠りを繰返しつゝゐる時でした。夢の中にチユニスから來た一人の女を見ました。その女と云ふのは、私がチユニスに八年間居る間にたつた二回しか會はない人で、彼女の容姿などは殆んど記憶してゐません。そして私がチユニスを去つてから九年になりますから、十五年間も彼女に會はないのです。それに私は一度も彼女の事を考へた事もなければ、又彼女を思ひ出す様な原因もないから全くの無關心で居りました。而かもその女が突然私の夢の中に現はれたと云ふのは全く不思議でなりません。それから一時間許り經つて事務所に參りますと、更に意外にも所員がこの夢の女の名刺を

私に持つて來たのです。彼女はモロッコへ旅行の途中、臘氣ながらもチュニスで私に會つた事を思ひ出して、私が今尙此處に居るか何うかを知る爲めに立寄つたのだと云ふ事が分りました。そしてこの女を乗せたボートが、タンジールに入つた瞬間に私の夢に現はれたのです。彼女が船に居るなどとは私には全然知らう筈はないのでした。

右は貴方の御研究の上に多少の御参考になるか何うかは分りませんが、唯だこの事實の確かな事だけは絶対に保證致します。

貴方は既に私は科學者であり、従て自分の受けた感覺に就て充分に考量したと云ふ事を御承知と存じます。

二つの中一つでも計算の上から、その確率を見出され、それが全く偶然の符合であらうと云ふ可能性を説明する人があれば、これは眞につまらない事柄になつて了ひます。

一九一八年七月六日タンデルにて

モロッコ政廳土木局技師長 ボルシエ、パネース

この第二の事件に就ては吾々は先づエーテルの波動から説明しなければならないが、この事は後章隔感作用の場合に述べやうと思ふ。

要するに、未來の科學は現代の科學に今尙未知で、又今日まで殆んど眞に研究されなかつたところの心靈の能力を、飽くまで説明する事を覚えなければならない。

次章に研究するものは、心的暗示、隔感、所を異にして起る心の傳達とその意思作用。心靈に因る幻影。未來の幻影である。そして是等の明確なる幾多の證據は明らかに肉體的感覺の力とは獨立して精神の靈的存在を立證するものである。

心靈と肉體とは各々異なる特性を賦與された全く別な實在なのである。

第五章 言葉もなく合圖もなく、而も遠方から作用する意志の力

科學は嚴正なり、苟も科學の名を存する限り、この前に淡然現はれて来る凡ての問題を絕對公平に見ればならない。

(サー、ワイリアム、トムソン)

吾々の心靈の力は種々様々の方向に表明されてゐるが、中でも、かの「言語に依らず、合圖に依らず、而も遠隔の地から働く人間の意思の力」は確かにその顯著なるもの、一つである。」

意思はその本質からいふと、非物質的な官能であつて、吾々が一般に物質と言つてゐる物とは全く異なつたものである。人はその心靈の力を通じて他人の腦に作用を及ぼす事が出来る。劇場に於て、或は教會に於て、自分は他の人から數碼も離れた後方にゐて、前の人をこちらに振り向かせる事が出来る。この場合に於て、彼はこちらで自分が何んな考へを有つてゐて何んな動作をしてゐたかを知らう筈がないのである。恁うした經驗は澤山にある。全くの偶然の場合を除いて、まだ少しも知らない

他人に關する事だけでも信用す可き實例が可成り多く發表されてゐる。

その人が實驗者に常に接してゐる知己の場合には、更に多く起るものである。だが、場合の何れを問はず、距離を隔てゝも尙確かに意思の力が働くと云ふ事が證明される。

唯物主義の批評家は、かゝる事は腦の或る未知の感覺の作用であつて、この作用は決して心靈の起因とはならないと言ふかも知れぬ。この反駁論に答へる事は至つて易い。腦は物質的器官であり、更に又、電氣仕掛の様な物である。その器械の背後、即ち腦の後方には人格が存在する。予が演説する時、先づ演説なるものを考へる。それが原因であつて言語はその結果である。この器械即ち氣儘な、氣紛れな、而も一面には推理的な、又反省的な、責任ある精神的な人格なるものを賦與されたところの腦を想像すると、自らそこに何うしても一つの假説を呼起す事になる。吾々は先づ、それから證明して掛らなければならぬ。吾々には眞理を理解させるところの吾々自身の感覺といふ物が果して存在しないのであらうか。

五感即ち視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺の作用に於ては振動は外界から來り、視神經、聽神經、嗅神經、觸神經の媒介で腦に傳達される。所が、或る距離を隔てゝ思想を傳ふる意思の作用は五感とは全く反對に、その振動が腦から外界にあるのである。即ち腦の中には能働的原因——心靈が存在する

のである。

心的暗示に關する著書は今日まで可成り相當な物が出てゐるし、又それを證明するに充分な例も澤山紹介されてある。予自身も亦、ラ、サルペートリエールで行つたシャルコー及びラ、シヤリテで行つたルイ博士等の實驗を始め多數の場合を親しく觀察した。中にも最も驚異を感じたのはハーヴルでやつたビエール、シヤネの實驗であつた。それは當時少しも神経を病んでゐない極めて善良な、そして實直なある農家の主婦に試みたものである。彼はその農家から、七哩も離れた所から、その女に向つて心で命じた事を完全に了解せしめ、その通りに行はしめたのであるが、豫めその事を感知せしむる様な處置は毫も取らなかつた。

意志は人格、個性、精神、心靈を表はすか。これは單に腦の物質に具つた物理化學的の力をのみ認むる解釋よりも更に一層確實な解釋をなしてゐるのではあるまいか。「我」と云ふものが存在するか。この質問をなす事が既に「我」の存在を自から答へてゐるものである。

吾々は茲に心的暗示の實例を綿密に觀察研究して、言語身振りと言つた様なものに依らず、只意志を通して、一人から他の人に傳達される心の命令に依つて人間の人格を明瞭に表現するものであると云ふ事を證明しやうと思ふ。

讀者は次のオコロウィッツ博士の有名な實驗の模様を了解したならば、これ等の問題を最も公平に判斷する事が出來やう。

博士は曾てヒステリーの癲癇を患つてゐた一婦人を引取つた事がある。その婦人は長い間の患ひで終には自殺狂の發作を見ると云ふ程度の重態に陥つたのである。

二十七歳になる彼女は、元々强健な質で、體格も立派な、一見して完全な健康體の人である事が分る位である。彼女は快活な、元氣に充ちた氣質の中にも、内には極めて鋭い道德感を有つてゐた。彼女の性格はあくまで眞實で、善良で、献身的な傾向もあつた。彼女は又、珍らしい才媛で、何事にも堪能で相當に觀察力も有つてゐた。そして或る時は餘りに意志が弱くて、端からいら／＼する程優柔不斷な所があるかと思ふと、ある時は意外な決斷を示す事がある。けれども些細な心の疲れや、ほんの何でもない事でも不意な刺戟に遭ふと、それが喜ばしい事であらうが、痛ましい事であらうが、その爲めに直ちに彼女の血管運動に反響して一種の病的發作を惹起し、或は神経の發作的失神狀態を招くのであつた。オコロウィッツは次の如く書いてゐる。

『或る晩、精神錯亂の發作が止つた後で、患者は靜かに眠りに陥ちた。すると、間もなく俄かに眼を覺まして、彼女の友と私とが傍に居るのを見て、自分一人の看護の爲めに貴方達を疲れして

は濟みませんから、遠慮なく此室を引取つて呉れと言ふのであつた。それが餘りに執拗く彼女が希望するので、私共は強てそれを拒むのも彼女の神経を亢奮させる事と思つたから、仕方なしに二人は立去つた。私は悠つくり階段を下りて來た。患者は四階にゐたのである。その時私は何となく間違ひでも起りはすまいかと云ふ豫感が浮んだので、時折立止つて耳を傾けた。それは彼女が數日前、幾度も自分で吾身を傷けた事があつたからである。私は中庭に來た時、患者の傍を離れてゐる事の可否に就て再び心配になつた。この時上の窓が突然開いた。見上げると患者の體がはや乗り出して居る。私はすぐ彼女が墜ちて來るかも知れないと思はれる場所に馳け寄つた。私は別段にしやうと思つてしたのではないが、唯だ機械的に私の全意志を集注して、墜ちてはいけないと止めた。それは本當に狂氣じみた事である。恰度、今撞いた許りの球の失敗を豫想して、失敗つたと思つた途端に身振りとか、言語に依つて球を止め様とする時の動作を眞似たに過ぎないのである。

だが、不思議な事には、大分身を乗り出した彼女は、この時すつと引退がつた。それから四五回同じ様な事を繰り返して試みた様であつたが、何れも決行するに至らずに、果ては疲れたやうにまだ開いてゐた窓の縁に脊を當て、じつと立ち止つてゐた。

彼女は蔭にゐる私を見る事は出來ない。殊に夜である。この瞬間、患者の友である某嬢が飛び込んで來て彼女の腕を捉へた。私は彼等の揉み合ふ音を聞いて階段を馳せ上つた。患者は私共の見分けもつかず、無頼漢だと感違ひをしてゐた程狂氣して居つた。私は卵巢壓迫を試み、漸く彼女を跳づかせて窓際から引離すことが出來た。彼女は數回私共を打たうとした。けれども辛うじて再び寢臺に戻して終に眠らせたのである。

彼女が催眠状態に入るや否や、先づ「難有う御座いました。お許し下さい」と言ひ出した。それから、

「私は窓から飛び下りやうとすると、その都度自分が下の方から支へられてる様な氣がしました」と告げた。そこで、

「それは一體何ういふ譯ですか」と訊ねると、

「存じません」と答へた。次に又、

「貴方は私の居つた事を知つて居なかつたでせうね」と念を推すと、

「えい、存じて居ります。初め、貴方が本當に立去られた事と思ひましたので、飛び下りやうとしたのです。けれども何うしても貴方が、傍に又は後にお居になつて、私を飛びおろすまいと

なさる様な氣が致しました」と答へた。」

同じく彼女に絡まる今一つの例がある。

「私は一日おきに患者を眠らす事にして、その熟睡を見計つて記録を取つてゐたのです。そして二ヶ月間の経験の結果、私が眞の夢遊状態に引入れやうとして彼女に近づいて行くまでは、彼女は少しも氣を亂す様な事はないと云ふ事が分つた。この日私は二、三の記録を取つた後で、今までの姿勢——私は彼女の後方數碼、彼女の眼の届かぬ所にゐて、ノートを膝の上に乗せ、左手で頭を支へてゐた——を變へないで、ペンを走らせ書く風を装ふて、ひそかに私が心で彼女に與へやうと思つた命令に全意思を集中してゐた。私は心で、

(一)「右の手を擧げなさい」(私は左手を額に當て指の間から患者を見てゐる。)

一分後……何の動作もない。

二分後……右手が震動する。

三分後……震動増加して、患者はその唇を擦つて右手を擧げた。

此の實驗は是れ迄の中で一番私を驚かしたものである事を斷つて置く。予は再び始めた。

(二)「立ち上つて私の所へ來なさい」

彼は眼を擦つて靜かに立ち上り、手を伸ばして重々しげに私の所へやつて來る。私に何んにも

言はずに彼女を元の場所に連れ返る。

(三)「左手の腕環を外して私に手渡しなさい。」

何の動作もない。

暫くして彼女は左手を伸ばし、立ち上つて某處の方へ行き、それからピアノの方へ歩いた。この時私は彼女の右腕に觸れ、少しく左腕の方に押した。その間私は自分の與へた心の命令に注意を集中してゐた。彼女はその腕環を脱づして何か考へる様であつたが、終にそれを私に手渡した。

(四)「立ち上つて卓の傍の安樂椅子に來て私の傍にお坐りなさい。」

彼女は立ち上つて眼瞼を擦り、私の方に歩いて來た。そして、

「私は何か他に爲なければならぬ事があります」と言つた。

彼女は何かを探してゐる——卓に觸れて見た——茶のコップを動かした。

彼女は又もこちらの方へ戻り、満足の微笑を浮べつゝ安樂椅子を掴まへてそれを卓の方へ押して行つた。そして疲れて力なく座つた。」

すべてこれ等の命令は私が心で與へたのであつて、決して身振りや、言葉で表はしたのではない。」

オコロウィッツの著書中には、この種の四十一件の経験が載せてある。

讀者は已に私がランコニー(アルス發行「未
知の世界へ」)の中、ある心靈が他の心靈の上に及ぼした心の作用の章に於て發表した幾多の實例を承知して居られる事と思ふ。

意志の作用や、心の暗示に關する斯かる確かな經驗は、物質や、化學的結合、機械的運動に歸する事は出来ない。それ等の原因は思想であり、心的原因であり、又吾々に未知な形の下に作用する心靈的原理である。彼の無線電信電話の事を考へよ！

心の暗示に就ての是の種の例は、久しい以前からメスメルに依て研究されて來たが、その前にはファン、ヘルモントが研究して居つたのである。茲に陪審官であり、學者であるザイフェルト氏の述べた顯著な例がある。最初、彼はメスメルを香具師位に見てゐたのであるが、次の事件の真相を了解するに迫んで遂にメスメルの説を認容するに至つた。

一七七五年洪牙利のホレツキー、ド、ホルカ男爵の舊城で行つた事である。メスメルは男爵に催眠術を掛け、その模様を觀ながら他に診察を受けに來た二、三の患者に應接して居つた。ザイフェルト

は何處までも彼を山師だと考へてゐたのである。

或る日、數枚の新聞が來た。その中の一枚にメスメルに關する記事が載せてあつた。それはメスメルが隣室に匿れてゐて、唯だ彼の指を患者の方に向けただけで、その患者に痙攣を起させるといふ事であつた。ザイフェルトはその新聞を手にして城にやつて來た。恰もメスメルが紳士達に取圍まれてゐた所であつた。彼は新聞記事の眞否をメスメルに質した。メスメルは相違ないと斷言した。そこで彼は無遠慮にこの壁一枚を通して作用する感應の實驗を要求した。メスメルは諾した。

「メスメルは壁から數呎離れて立ち、ザイフェルトは觀察者として、實驗者と被實驗者との兩方を視得るやうに半ば開いた扉口の所に身を置いた。

メスメルは先づ人差指を患者の方向と思つた方へ向けて數回矩形の運動を始めた。間もなく患者は噉々言ひ出した。彼は脇腹に手を當て、苦しんでゐる様子が見えた。

ザイフェルトは患者に「何うかしたのですか」と尋ねた。彼は「私は氣分が悪い」と答へた。ザイフェルトは更にその模様を訊くと、「私の體中のすべての物が右から左へ搖れる様に感じます」と言つた。そこで、一々質問する事を避ける爲めにザイフェルトはその患者に向つて「體内の感じをその通りに詳しく話して呉れと望んだ。二、三分の後、メスメルは彼の指で橢圓運動を

始めた。その時患者は「あゝ、何もかも圓くなつて私の周りを廻つてゐる」と叫んだ。

メスメルはすべての動作を止めた。すると殆んど同時に患者は最早何も感じないと言明した。即ち患者の動作の瞬間や、その間隔ばかりでなく、その行爲までも凡てメスメルの患者に施さうとした意志とよく相應して居つた。(オコロウィッツ著「暗示に就て」の中に引用されたカーネル著「フランツ、アントン、メスメル」中の記事)。

予は亡友巴里工藝學校のローシヤス大佐やニースのバルテイ博士その他の實驗者に依て行はれた同様な事例を知つて居る。兎に角、離れた場所に在つて意志の作用する事は、實際この問題を研究した人々に依て證明される様に何等疑ふ餘地は無いのである。

十七世紀の卓越した醫者であり又、有名な幻想者であるフアン、ヘルモントは夙にこの問題によく精通し、既にメスメルよりも前に此に關する意見を發表して居る。彼はすべての人は所を異にしてゐても自分と同じ様な人々には自分の意志を感應せしむる事が出来る。唯だこの力は常に「肉」に依て抑へ隠されてゐるものであると信じて居つた。故にその目的を達する爲めには施術者と被術者との間に相通するものが必要である。被術者即ち患者は先づ鋭感でなければならぬ。そして又彼の内的想像の力に依て彼自身から進んで動作を迎へる程に感覺が慣れてゐなければならぬ。此の不可思議な動作

を特に鋭く感得するものは胃腔である。是れ胃の感覺は指とか、眼とかの感覺よりも一層微妙であるからである。時には患者は胃の邊に手を當てる事が堪へられなく感ずる事がある。

彼は尙、次の如く書いて居る。

「私は今まで大なる神秘の扉を開く事を期待してゐた。それは人間にはその意志或は想像の力に依て自己以外のものに作用し、又遙か離れた對象に永續的な感應を印象させる能力である。この神秘な力——能力こそ理解に困難な肉體の磁性と力、人間の精神力とか、その宇宙支配等の問題を始め種々の問題の上に充分な光明を投ずるものである。」と。

フアンヘルモントは一五七七年から一六四四年迄存命した人である。

一六四一年羅馬で發刊されたキルヘルの著書中にある動物磁氣に關する章を開いて見ると、「同情と反感」「人間同志の磁性作用」及び「音樂の磁性」等の例がある。

斯様な心的經驗は今に始まつた事ではなく、遠くイエス、キリストや、ピタゴラス或はそれ以前に溯るのである。

だが、心の暗示とは何であらうか。

催眠術者は彼等の意志がある「流れ」となつて集中し、その後阿片包の様な風をなして最も近い

方向に放射するのだと信じて居る。この流體は極めて容智で、從順で、一たび流れ出ると正しい道を辿り、角を曲り、目指された人に當る。そして、その目的物を占領してしまひ、充分にその物に浸透した瞬間に睡眠が起るのであつて、相手が遠からうと近からうと、距離はこの作用に毫も關係がないのだ。これは全く明瞭な事であつて、モリエールが、「阿片が人を眠らせるのは、それが眠らせる力を有つてゐるからだ」と云つた古い説明と同様に最早議論の餘地のない事である。

この事に關してオコロウィツツは下のやうに書いて居る。「吾々は先づこの流體の存する事を究め、そして、それが射出される事を明かにし、次にその進むべき道を發見し得る事を確め、然る後、それが目指された人の神經組織の中に正しく止まり得る事を證明しなければならぬ」と。併しこれ等はすべて既に予が一八六五年以前に提案して置いた「心の力」と云ふ説明の中に入れて了つた方が妥當であらうと思ふ。

要するに、それが如何なる傳達の様式を取るにしても、精神が他の精神に働く心の作用に就ては更に疑ふ事は出来ない。

觀念は自ら進んで行くのか。それはエーテルの振動に依て傳へられるのである。吾々は既に觀念がその動的相互作用を到る所に、即ち放射物の様に、有らゆる方向に放射される事を知つて居る。それ

は輸送される物質ではなくて傳播する波動である。そして、作用は一般的ではあるが、唯だその轉換するに適した環境と必要な條件とを見出すまでは先方に感知されないで居るのである。この波動はAなる意志から出るとして、Bなる腦が必要な條件を有つてゐるとする。そこで相通する觀念にはBの中に作用して、Bは催眠術をかけられた様に眠つて了ふのである。

或る人は、作用の範圍内に在る敏感な腦は何の故障もなくすべて感應すべき筈であると言つて反對するかも知れない。けれども事實さうではない。人の腦は常にそれに適應する様に慣らされてゐる譯でもなく、又豫め發信者と交渉があるのではない。つまりこの關係といふのは發信者の動的氣分と、受信者の受け入れる調子とが相通すると云ふ事に存するのである。

心の暗示と思想の傳達とを説明する爲めに、嘗て催眠術者は一つの電流が物質的接觸なしに、他の電流に感應せる様に、又は無線電信の場合のヘルツ波の様に感應作用に依て傳達されるのだと云ふ假説を提出したのである。

遠距離の心の作用は意識される事もあり、されない事もある。

三十年前、心靈學者達が觀察の結果として、恐る／＼持出した提議は、その當時に於ては大に論議の餘地ある問題とされ、而も自らその道の知識を誇つてゐた學者達からは再度ならず懷疑の苦笑を以

て輕蔑されたものであつたが、今日では最早問題ではない。今や吾々は無線電信の發明から、それと同様な傳播の作用さへ見るのである。左に無線電信の作用をその大體に就て述べると、

無線電信の作用は吾々の今まで述べて來た以心傳心的現象などよりも、恐らくもつと不思議な現象であらうと思はれる。吾々は今日強大な發電機によつて饋電された強力な蓄電器の間歇放電によつて起されたヘルツ波を使用する。この波は一秒間三十萬基米の速度で空間に擴がる無線電波は送信装置に聯がつてゐる空中線から放射され、遠距離に在る同じ空中線に依て收容される。空中線は外物よりの電氣的接觸から完全に隔離された一本又は二本の線で出來てゐるもので、それは唯だ送信装置と受信装置とだけが通ずる様になつて居る。

無線電波は吾々には作用しない。吾々の現在有つてゐる感官ではそれ等の波を感じるものはない。故にそれを聽く爲めには特殊の装置が必要である。この装置が即ち檢波器であつて、無線電波は同調管とこの檢波器に依て調節され、受話器に依て吾々の耳に聞えるのである。電波は恰度池に石を投げ込んだ時出來た波の様に、波長と呼ばれてゐる一定の距離を以て擴がつて行き、そして特殊の装置に依て受話器の所で適當に變化される。けれども、受信する方では出來る丈波の強さを大きくし、音を明晰にする爲めには發信装置と調子を合せなければならぬ。無線の

術語を籍りて言へば合調して居る事を必要とする。

この合調は受信所に於て空中線と檢波器との間に受信變壓器を置く事に依て得られるのである。

斯くして技手は受信所の最大波長に一致する位置を求める。同時に異なつた波長を以て通信してゐる他の放送所からの電波を完全に防止する事が出來る。この波長は調整器の位置と蓄電器の容量の如何に従つて受信装置に作用するのである。

種々の波長によつて送り出された色々の通信はすぐ耳に入らないが、同時に空間に傳播して行くのであつて、吾々がそれを受信せんとする爲めには受信装置を調節すれば可いのである。斯くして少しも他の通信に妨げられる事なく二人だけで對話してゐるのと同じである。

最近の無線電信（又今日の無線電話）の發明は、吾々が遠方へ思想を傳達する方法を了解する上に、尠なからず助けとなつた。科學は今後更に多くの發見をするであらうし、從て色々の現象に對する説明法も自ら變つて行く事であらうと思はれる。現在に於て説明出來ないからと云つて、すぐそれを否定する事は確かに間違つてゐる。例令今日の物理學で發見されないとしても、人間の意志が遠方に通じて感知させる事が出來る。吾人は既に心靈の存在、そして腦がその活動機關であると云ふ事實を立

派に證明されてゐるのである。

一九一四年から同一八年までの彼の歐洲大戦役の間に、予はジュヴィシーの自分の天文臺から無線電話でエツフェル塔と通話して居つた時、二人の通話者は恰も應接間か、講堂にゐる様に明瞭に話し合つてゐるのを聽いて少なからず驚かされたのである。當時まだ一般に知られてなかつたとは言へ、彼のモルス式電信の様な手数のかゝる廻りくどい通信法ばかり見て來た眼には、何等導線に由らず、エーテルの中を通過して來る電波に依て音聲がはつきり聞えるこの新發見に驚異を感じたのは無理ならぬ事である。この電話は音聲を傳へて來るのではなく、再び音聲に變はる電波である。

そこで、吾々は多少隔つた二人の間の思想の相通が實驗的に確實である事を知つた。

吾々は又、隔感的事實の觀察から遠方に居る瀕死の人の精神が、屢々その精神を向けられた人の腦にある著しい印象を與へ、そしてそれが單に言葉となつて表はれる許りではなく、その人の姿を見せ、又は何かの形狀となつて映じ、而かも、時には恐ろしい音までも伴ふ程の強さを以て作用する事があるのを知つた。

これは哲學的思索の上から見て、僅か三十年前には吾々の夢にも豫期しなかつた宇宙の一つの新現象である。

自動力のない物質はエネルギーの眼に見えない放射に依て消滅する。宇宙の生命の中に存在するものはエネルギーであり、エーテルの力であり、運動である。

予はランコニー(アルス刊「未知の」世界へ三六九頁)に次の様に書いた。

『吾々の心理的力はエーテルの運動を生み出す。そしてこのエーテルの總ての運動の如く、遠方からそれ自身を運び來り、吾々自身の運動に和して腦に認識される様になると云ふ事は最早疑ふの餘地はない。心理的作用がエーテルの運動に變つて了ふ事は、恰度電話に起る現象と似て居る。兩端に在る同一の受電板は音聲からでなく、電力で傳へられた特殊の高い音の運動に變はる事がある。併し是は單に壁に過ぎない。』

一人の心が、遠方に居る人の心に通ずる作用、就中死の作用の様な眞摯な場合、特に急死の場合に於ける思想の傳達、精神の暗示、遠距離間の相通は總て是れ、恰も鐵に對する磁氣の作用、海に對する月の影響、電氣に因る音聲の傳達、分光の結果、星の化學的構造に關する知識の革命、又は現代に於ける總ての科學的發見と同様に、奇蹟的なものではない。唯だ心理的相通に關する事は上述せる科學的研究や、發見に比して更に程度が高いのである。そして吾人は今、纔かに其の研究の第一步を踏み出したに過ぎない。

これは予が一八九九年に書いたのであるが、而かも今日とてこの考へに毫も變りはない。否、無線電信や電話の發明に依つて一層その信念を強められたのである。

意志が單に思想のみを通じて作用した例は、予の同僚であるシユモール氏がその妻君に行つた次の實驗に依て示されてゐる。

「一八八七年七月九日は暖かい、併も風の荒い日でした。私は食堂に吊つたハンモックの上でグルネー氏の書いた或る小冊子を読んでゐました。午後三時頃、私の傍には妻が安樂椅子に横になつてぐつすり寝込んでゐました。この時私は不圖、心の力で彼女を醒まさして見やうと云ふ考へが起つたので、私はこの以心命令に全意志を集注して、ちつと妻を見据えて、心の中で、「起きろ、起きて呉れ」と叫びました。三、四分間経つたが何の反響もありません。妻は依然靜かに眠つてゐました。私は「これが成功したら素破らしいものだかな」と獨語を言ひながら、一度は斷念しましたが、數分の後、もう一度やつて見たのです。矢張り駄目でした。最早實驗の事はすつかり諦らめて了まひ、再び本を読み始めて、後は何も考へてなかつたのです。

十分許り過ぎてから、妻は俄かに眼を擦り乍ら起き上り、如何にも驚いた様な、また幾分煩さ相な顔色をして私を見て、

「何んか御用なの？　なぜ私をお起しになつたの？」と言ひ出したので、私は

「俺は何んにも言はないよ」と答へると、

「いゝえ、被仰いました！　貴方は今まで私を起さうとして私を苦しめて被在したわ！」と彼女は言ふ。

「それは冗談だう、俺は先刻から口を開いた事はないのだから」と諭すと、それでも彼女は尙、怪訝な顔をして、

「私は本當に夢を見たのかしら？　さうだ、矢つ張り夢を見たんですよ」と漸く覺つたらしい。

私は笑ひ乍ら、

「それは面白さうな夢だな、一體何んな夢？」と聽く。すると彼女は、

「私は甚く嫌な夢を見たの！　何んでもクールブアの十字街に居た思ひました。風が強く空が曇つてたやうでした。不圖、人間の様な形をした物……男だか女だか分らないが、白い布を纏つたものが坂の下へ轉つて行きました。そして一生懸命に起き様としてゐるのですが、中々起きられさうもないので、私は助けてやらうと思ひました。初めは解らないものが私を緊かり掴へてる様に感じました。それが終ひには貴方だつたのです。貴方が私の夢の姿を打消さうと努めて被在

した事が分りました。けれども、私は貴方に逆らつて成るだけ醒めないやうに力んでた事をよく覚えてゐます。私が今起きた時にも矢つ張り貴方の「さあ起きろ」と云ふ聲がまだ響いてゐました」と始めて夢の顛末を告げたのです。

私が實際に心の中で「起きろ」と命じた事を話した時、彼女は驚いてゐました。彼女はその時私がおんな本を読んでゐたかも知りませんし、今まで心靈上の問題に興味を感じた事も、また私からも誰からも嘗て催眠術をかけられた経験はないのです。

ア、シュモール

これに類した觀察が予の書類中に尙澤山ある。確かにこの例だけでは凡てのものを説明する事は出来ない。何故に命令と結果との間に十分間の間隔があつたのか、シュモール氏は科學上の見識に富んだ人である。吾々は太陽に關する種々の卓越した觀察については氏に負ふ所が甚だ多い。氏は一八八七年に予と協同して佛蘭西天文學協會を創立した一人である。吾々は氏のこの報告を疑ふ餘地はない。さりとて、これを唯だ偶然の暗合に歸して了ふ事も出事ない。

心で見たり、心の中で讀んだりする事は、ドリューズ。デュボテ。ラフォンテース。シャルビニヨンなどの著書に出てゐるが、これ等の現象は夢遊患者に屢々起るものである。就中シャルニヨンの

著書に述べてある次の話は最も慥かな事實である。

「吾々は何回も心の中で虚偽の影像を描いた。そして試みた夢遊病者達は皆この影像を見たのである。吾々は心の要求に依て屢々夢遊病者から言葉、合圖、動作を招き出した。又夢遊病者が少しも知らない外國語で質問しても彼等は正しく答へる。併しその答は言葉に就ての知識を示さないで、話す人の思想を讀んで居ると云ふ事を示すのである。故に實驗者が自分に解つてゐない事を質問すると夢遊病者はそれに答へる事は出来ない。

ある人を遠方から眠らせ、これに或る動作を暗示する實驗は既に古への催眠術師に依て何回も試みられて成功したものであつて、如上の場合などは別段不思議な事ではない。

マカリオ博士は、五十年來の予の友人であるがグロミール博士が或る夜、ヒステリックな婦人を催眠術に依て眠らせ、その後で夫君の承諾を得て試みた面白い實驗に就て次の如く述べた。

「一言も話さずに彼女を大洋中に連れ出した——勿論それは心理的に——海が靜かであつた間は彼は平氣であつた。けれども、間もなく催眠術師が一度び暴風雨を暗示すると、彼女は刺し通す様な金切聲を擧げて近くに在る物に縋かかりついた。その時の彼女の聲、涙、表情は眞實の恐怖を示してゐた。そこで、術者は尙ほ心の中で波を漸次靜めて元の通りにした。そして船を揺り動かす事

も止めた。彼女は依然喘いで四肢を震はしてゐた。間もなく彼女の心も鎮まつて來た。その時、婦人は「もう決して海へなど連れ出して下さいますな」と恨めし相に言つた。そして「それにしても彼の氣の利かない船長は何故私達をブリツチに上げて呉れなかつたでせう」と尙ほ不満の様子であつた。

グロミール氏は彼女の叫び聲には全く驚いたと言つてゐた。彼は前に自分の試みやうとする實驗の性質を噫氣にも出さなかつた相である。』

マカリオは又次の如く述べてゐる。

「この思想の傳達と云ふ不思議な力は、數多の夢遊現象に依て始めて説明され得るのである。若し此の現象を看過する時は、人は依然超自然的作用に歸して了ふ所である。彼の夢遊病者に屢々見る所謂「言葉の賜物」と云ふ事も、この思想の傳達作用から容易に説明される。それは彼等が少しも知らない外國語で話され、その國語で答へるのは夢遊病者の場合と同様相手の言葉を聴くのではない。相手の心を読むからである。故に相手の人が知つて居る限りは、それが希臘語であらうと、羅典語であらうと、亞刺比亞語であらうと答へる者には何の差間もない筈である。つまり彼は自分の國の言葉で話されたと同じ様に理解する事が出来るのだ。實例はこの理解を證明する。

上に紹介したグロミール氏も數回夢遊病者にその知らない國語で質問して見た。最初患者はそれや理解しなかつた。氏は執拗に何回も問を繰返してゐる中に、患者は終にそれが解つて旨くその間に合ふ様に答へた。けれども、氏が知らない國語で話した時には——即ち氏にも意味が解つてない言葉を用ひた時には——夢遊病者は少しも答へなかつた。つまり催眠術を掛ける人が、自分の觀念の添はない言葉を用ひたからである。』と。

予はこの大分議論のあつた知らない言葉を理解するといふ問題に就て、否定すべからざる多くの證據を蒐めた。

中には被驗者の見てゐない所で行つた思想傳達の實驗の例もある。それは被驗者に隠して繪を描いて、それを寫させたのである。是の種の例は甚だ多い。ランコニー(アルス刊「未知の世界」三四四—三四八頁參照)

思想傳達の現象は最早決定的事實となつた。忠實にそして深くこの問題を研究した哲學者にして誰一人これに異議を挿む者はない。既に多くの實驗と確實な證據を有つてゐる斯かる事實に對して今尙否定してゐる人は何れも頑迷な人でなければ淺薄な人達許りである。

隔感的現象は普通の狀態の人(即ち官能の疾患も幻覺もない人)に於て、その睡眠中と覺醒中とを問はず、一般に不意に現はれるものであつて、それは離れてゐる所に起つた事件と一致して或は強い

物的印象となり、或は他の何かの印象となつて顯示されるものである。

衝動的印象換言すれば自己の意識に因らない印象を受ける人は、大概普通の状態に在るが、それを送る人は、異常な危険状態——即ち突發的事實、苦悶、氣絶、昏睡、死等——に漸して居るのだと云ふ事實に深く注意しなければならぬ。

上記の觀察から、人間の意志が言葉もなく、又肉體的感覺の介在する事もなくして作用する事を證明する。

物質に及ぼす精神の作用に就ては久しい前から研究されて來たのであるが、中にも血液循環に因る或る疾患——即ち赤斑點、皮膚充血、發泡、出血、出血痕等——が自己暗示によつて作り出された現象はその最も顯著なものである。精神と肉體とは別物である。精神は肉體を支配する。思想又は微妙な觀念すら物質的結果を作る。心的幻想はある條件の下には器官を創成し又は變更する場合があるといふ事は幾多の實例に依て表明されてるのであつて、この根本的事實には最早一點の疑を有つ事が出來ない。そして、これ等の例の中には觀念に依り、信仰に依り、或は單に確信だけに依て皮膚の上に痕痕を示し、流血さへ見た例は、吾々の既に認めてゐる事である。アツシシの聖フランシスは極めて敬虔な、そして神秘的な靈魂を有つてゐた人であるが、彼は俗塵を避けて深く森林に入り、一心に祈

願をこめた。そして彼は二三人の弟子をつれて森を出て、シリヤ、埃及に巡教し、後、伊太利に歸つた。それから彼は久しい間、斷食苦行を續けてゐたが、その結果、彼は終に全く空想的な幻覺に捕はれて了つた。中でも彼は種々の彩られた翼を有つてゐる天使が彼の前に現はれ、彼を縛つてキリストが磔刑にされた爲めに出來たのと同じ様な傷痕を印したのだと信じてゐた。事實、彼の手足は釘で刺され、彼の脇腹は槍で突かれたやうに穴があいてゐた。そしてその痕は永く消えなかつたといふ。

肉體に働く心靈の靈的作用は茲に十分に證明されてゐる。この事實は極めて重大である。併も唯物論的生理學の見地からすると全然靈的作用を認めない。彼等はこの作用を實際あつた事ではなくて、宗教的傳説であると考へてゐたのである。そして此の説が一二〇年頃から起つたので、彼等はその頃の人々の輕信に歸してゐる。「誰かそれを見たといふ證人でもあるのか」と言ふのが彼等が否定の唯一の理由であつた。唯だ、修道僧や、熱心な基督教徒だけは何んでも盲目的に承け入れてゐた。

一般に奇蹟的事實と云ふと聖者に歸して居つた。けれども斯かる例は決して聖者丈に獨得なものではない。予は本書の著述に關した研究によつて是の種の奇蹟を有つてゐる多くの人を知つて居る。意志の力、精神の力、心靈の力、自己暗示の力、並びに物質に及ぼす精神の作用の表示等は痕痕の生理的現象に依て確實な證據を示されてゐる。これ等の現象を否定する人々は唯だ其處に欺偽、迷盲、輕信

等を出したに過ぎない。この瘡痕は實際に現出する。幻覺によつて苦を受けた人々の掌に、足に、又横腹に本當の穴があけられる。そして磔刑に處せられたキリストの傷に相當する個處から事實出血もする。この例は他にも無數につて、否定し難い證據を提供する。その中、二、三の例を次に示せば、

「一八一二年十月十六日にボーゼン附近のチロルのカルトムで生れたマリア、マールは、アッシシの聖フランシスの様な不思議な少女であつた。彼女が最初の聖餐式を受けたのは十歳の時で、その時分から非常に感情に熱し易い、そして極めて敬神の念の深い女であつた。聖餐の麵包を受ける時にも、神秘的聖光が一時に彼女の前に差して來て、驚きの餘り母の腕に靠れて氣絶して死つた。彼女の信仰は年と共に一層熱烈を加へて來た。遂に童貞の誓を立て、一生を祈禱と敬神に身を捧げた。

その頃、カルトムに尼僧達で聖フランシス修道院が出來た。十八歳の時彼女は其處へ聖テレザにあやかつて、テレザと名告つて入つた。彼女は自ら進んで肉體の苦痛を神に捧げる事が何物よりも幸福であると思つてゐた。神秘的靈感を信じてゐる彼女は、毎日寢臺の脚の所に跪いて、手を握り合せ、天を凝視して、恍惚として、一心に主キリストの事をのみ考へてゐるのであつた。二月二日清めの日の後に、彼女の手足と脇腹に瘡痕が現はれた。家族もそれを見た。懺悔聽聞僧

もそれを見た。醫者もそれを見た。お上からの指圖で教主トレントの大僧正もそれを検べた。その他多くの人々に依て證明された。毎金曜日に彼女は夢中になつてイエスキリストの事を考へ詰めて、それが熱して來るとこの傷痕から血が吹き出して來るのであつた。

同様な瘡痕の現象は同じチロルにもう一つあつた。それはマリア、ドミニカ、ラツツアリーと云ふ女で、彼女は屢々昏睡状態に入つては色々の幻想に耽り、痙攣を起す事さへあつた。彼女は一八一五年三月十六日、トレントから十時間行程位のカバリー附近のカブリアナ、ド、フィーメに生れ、十九歳の時、キリストの苦難の傷を感じたと云ふ幻想に捕はれ、後間もなくその傷が實際に現はれた。そして、聖フランシスの場合と同じ様に、手足や、脇腹から出血し、また彼女の額には荊の冠の印がついて、そこからも多量の血が流れた。それが金曜日には殊に著しく、彼女の顔は宛然血汐を浴びた様に見えたと云ふ。是は醫師デイクロシエ氏からの報告である。

又、これと同じ時代の事であるが、「チロルの處女」と言はれたクレセンチャ、ニークルチは一八一六年六月十五日カナに生れて、それからメランや、トレントや、或はベロナに住んでゐたが、この女も前に述べた女達と同様な徴候を示し、十九歳の時、六月七日の聖靈降臨祭の日、彼女の手に瘡痕が現はれ、二、三日後には足に、最後には脇腹に現はれて多量の血が流れ出た。こ

れも矢張り金曜日、甚だしかつた。この事實は目撃者であるカニエーのアーベ、ニコラスの著書から引用したのである。

吾々は自己暗示の例を求むるや、直ちに豫期以上多數の報告を得た。幻想の力は殊にカザリン、エムメリツヒの癡痕の例に著しく示されてゐるのであつて、この事實に對しては如何にしても物質に作用する力を認めない譯には行かない。

醫學の大家達は頭から如上の事實を無視した。自然科学の博士達も斷乎としてそれ等の全部を否定した。併かもカザリン、エムメリツヒの癡痕は彼等學者達が講義をした榆の木の子葉と同じ様に確かな事實である。

吾々今、この珍らしい事實を研究して見やう。

『アンニー、カザリン、エムメリツヒは、一七七四年九月八日ウエストフアリアの田舎區ケースフルドの近傍、フラムスケといふ寒村に生れ、幼少の時から敬神の念の篤い女であつた。或る日彼女は次の如く語つた。

私が五六歳の頃だつたと思ひます。信條第一の「全能の神」と云ふ事に就て深く冥想に耽つてゐました。その時、宇宙創造の幻影が私の心靈の前に現はれたのです。天使の降臨、地の創造、

樂園の創造、アダムとイヴの出現、それからこの二人の不従順——すべて慚うした事實が私に明かに示されました。私は眼の當り見てゐる様な事が、誰れにでも見えるのだと想つて居ました。』と（彼女の幻想は早熟であつた。）

彼女が見た幻像の端緒だと自ら語る所は慚うである。

『それは彼女が尼寺へ入る四年前で、一七九八年即ち彼女が二十四歳の時であつた。アースフェルドのジエスイツト教徒の牧師會館に在る耶穌像の前に跪いて、全身の熱情を捧げ一心不亂に祈禱に耽つてゐたが、終には恍惚として快い幻想に陥つたのである。彼女は言つた。『その時でした。天から私の花冠が若い人間の姿になり、光彩に包まれて降つて來ました。そして聖櫃を置いて行くのを見ました。その方の左の手には花の冠を持ち、右の手には荊の冠を有つてゐて、私にどちらかを選べと言ふのです。私は荊の冠を戴きました。その方は私の頭に載せて下さいました。私は自分の兩手でそれを深く額に押し込みました。と思ふとその方の姿が消えて、俄に私の頭が激しく痛むのを感じました。間もなく其處に荊で刺された様な傷が出來て、夥しく血が流れ出たのです。』と。それで彼女は其苦惱を秘する爲めに帽子を前額深く引下げて冠つてゐた。

一八〇二年、彼女はドウルメンの尼寺に入り、その時から毎日天に向て恍惚とした憧憬の日を

送つてゐたのである。

一七〇

或る日、彼女の天の花嫁が現はれ、彼女に十字を切つた。すると、長さは拇指の三倍位で、幅が拇指の半分位の赤い二重の十字が彼女の胸にあらはれた。一八二二年十二月二十日彼女はちつと寝臺に休んだまゝ、手を十字架に上つた様に伸べ、顔は火のやうに熱し、恍惚として救世主苦難の時を追想してゐたが、終には熱烈な禱を込めて主キリストと苦痛を共にしたいと願つた。突如、彼女の前に光が現はれた。そして、その真中には十字架にかけられた主キリストが居られたのを見た。救主の五つの傷は太陽の様に輝いた。この時、アンニー、カザリンは身を切らるゝ悲哀を感じた。そして又、眼のあたり神に接した事を限りなく嬉しく思つた。彼女は神の子の傷を吾が身に引受けたいと切りに念じてその傷口に飛び込んだ様に思はれた。すると忽ち五つの傷口から三筋づゝの赤紫色の光が差し出て、それが矢に變つて彼女の手足や、脇腹を刺した。そしてその傷口から血が滴り出た。それ以來彼女はすべての點に於て主キリストと同じ様な苦しみを感ぜ得るやうになつた。

これ等の事實をも否定せんとするのは無謀である。最早不可能である。獨逸の各地方から、その他の國々から多數の人が彼女の傷を確めに態々やつて來た。

この出來事の評判が外國まで擴まつたので、佛蘭西では彼女の居る町に政廳を置いた時、ムンステルの知事が自らこの事實を確むる爲め警部を連れてドウルメンに來た。彼等は生理學上から、又すべての科學上の説明から何うであらうと、兎に角動かす可らざるこの事實を認めない譯には行かなかつた。知事は特に軍隊から八人の専門醫を遣して彼女の傷口を治療せしめた。其結果一時は癒つた様であつたが、次の金曜日になると再び元の通りの傷になつた。

其他、彼の聖テレサ。リツキの聖ゲルトルド。聖リドウイン。匈牙利の聖ヘレン。マントウアの聖オザンヌ。ルヴェインの聖イーダ。ストルムベレーンの聖クリステイネ。十字架の聖ジャンヌ。マルニの聖ルシー。シーナの聖カザリン。コチスのパスチスとクラリツセ。ランコニオゾのカザリン。ヴェロニカ、ギラニ。コロムブシヤノルトマデライネ、ロルデル。ローゼ、セラ等數へ來ると、この種の象現を示した例は實際枚舉に邊ない程である。けれども、この問題について通ぶる事は本章の目的ではないから、唯だ茲には上に引用した例につけ加へて、現代の學者達の注意を惹いた事件で、一八六九年にリエージュ大學のデルブウフ教授によつて研究された白耳義のボアデーヌの有名な聖痕の所有者ルシー、ラトローの例だけを通る事に止めて置かうと思ふ。

ルシーは一八五〇年一月三十日に生れた女で、幼少から燃えるやうな情熱を有ち、時々夢中にな

つて冥想に耽り、そして神秘的幻想をする事があつた。彼女が最初に瘰癧を現はしたのは一八六八年四月二十四日で、復活祭後十二日目の金曜日、彼女が十八歳の時であつた。ルーシーはその日の五日前に漸く妙齡に達した許りであつたが、一年以上も前から病身で、同じ年頃の娘の様な元氣は更になかつた。その日、彼女は左の横腹にはじめて瘰癧が出来たのである。そして、次の金曜日には左手に現はれ、第三の金曜日には五つの瘰癧が悉く揃つた。荊の冠の瘰癧から血が出たのはそれから五ヶ月の後である。

思考を以て有機體の物質的作用であるとのみ考へてゐる普通の生理學から見ると、如上の事實は全然反對の立場に在る譯であつて、従て頭の古い學者達は理が非でもそれを否定してゐるのである。中にも一八七七年に、有名な醫師である彼のヘル、ザイルショーの如きはルーシー、ラトリーの瘰癧に就て、「これは詐偽か、奇蹟かのヂレムマに陥つてゐるもので、奇蹟なんといふ曖昧な事を取除いて了へば、後には唯だ詐偽が残るだけだ」とさへ極言してゐる。併し、吾々は自由な科學の見地から、それは決して詐偽でも、神秘でない事を立派に確める事が出来るのである。

著者は多くの春秋を重ねたお蔭で一八五八年のルルドの創造（舊教で祭る聖ルルドの洞窟の起り始め）と時代を同じうする事を得た。予は又、田舎に住んで居る目撃者からP夫人とG中尉（中尉は一

八五七年セント、シルの出身で當時はルルドの歩兵第四十二聯隊に勤めてゐたが、後彼は東京に於て大隊長として戦死した人である。）との戀愛物語を聞いた。この話から彼の洞窟の事や、白痴者ベルナデット、スービールの奇談が生れたのであるが、初のP夫人懺悔聽問者であるルルドの正直な牧師ベイヤール長老もこの事實を否定したのである。けれども終には此の長老さへ處女マリアの出現を認めなければならぬ様な不思議な結果を齎した。それは予と同年な友人マルタン提督も、海軍大佐のG氏も、又、ベリッツア氏も「ルルドの奇蹟」を確實に知つてゐる人々である。兎に角、この奇蹟は觀念の力や、精神的歡喜や、信仰等から來た最も珍らしい表顯の一つである。

「ルルドの話といふのは、或る美しい婦人が不意に洞窟に現はれて「私は聖靈を宿したマリアである……行いて浴みして草を食べよ」と知覺を失つた子供に幻想を起させ、少女をして確かにマリアを見たといふ確信を與へた事に始まる。」

これと同じ様な事はラ、サレットの寺院にもあつた。一八四六年九月十九日に二人の子供に現はれた聖母といふのが、一八五五年のグループルの裁判所の判決に依つて、マドモアゼル、ド、ラ、メルリエール嬢が故らにこの喜劇を演つたのだと分つても、尙ほこの寺院は二十何年間の間も榮へて居つた。又、ラ、サレットの水は種々病に特效があつた。現に予は一八五四年にラングレで自分の眼に試

して見て知つて居る。

自己催眠に依て演じ出された種々の奇蹟は、今も昔も、耶蘇教徒の間にも、異教徒の間にも等しく觀察された事實であつた。吾々は又、昔セーヌ河の水源に於て羅馬人からセカナの女神に贈つたいふ奉納額をデイジョンの博物館で見た。予が最近サン、セーヌ村に行つた時、その村に近い寺にも神に捧げられたといふ同じ様な額を見た。過般セルミン博士がエスクュラピウス（醫の神）の殿堂の廢墟からカワデイス氏が持て來た發掘物の中に、その當時行はれた神秘的治療法の模様が彫刻されてある柱脚を發見したと言つて居る。これは紀元前三世紀又は四世紀時代のものであつて、その記録で見ると、當時は吾々の今日想像してゐた事と全く異つた仕方の様に思はれる。即ちエスクュラピウスに仕へてゐる僧侶達が、その聖殿に於て治療をやつてゐたのではなくて、治療したのは神自らであつた。病人等も神から直接に不思議な手術を受けたのだと確信してゐるのである。例へば胃痛患者がエビダウルスへ來て眠つてゐる間に次のやうな幻影を見たと言つて居る。

「神が連れた來た從者に命じて一人の男をしつかり抑へさせて置いて、その間に神が自ら彼の胃を開いて、痛を切り除き、そして再びその傷口を縫つた後で患者はすぐ癒つた様に思はれた。」と

吾々は常に今日の外科醫がする様な手術を自分の肉體に受けてゐるのだといふ幻影を病人に起させ

てゐるのを到る所で見ると

ルルドへ行く病人は何れも癒つたと云ふ心像を抱いて歸る。けれども事實癒る者は少數である。それは病入の多くはその希望がある形となつて現はれ、それが不思議な力を持つた超自然的のある物が働くと同じ様な働きをする可能性を缺いてゐるからである。換言すれば神秘的な力に適應して作用し得る神經組織を有たないからである。

熱烈な宗教的信念は色々の形を變へる豫言の神であつて、それがアポロとなり、エスクュラピウスとなり、イエスとなり、惡魔となり或は處女マリヤともなるので、即ち信仰意識そのもの、先入觀によつて善神にも惡神にもなるのである。

予は上述の様な現象が唯だ自己暗示許りではなくて、時には取りとめのない精神力がその作用を手傳つてゐる事があると云ふ事實を茲に附け加へて置く。

予は尙意志についての研究を續ける。

意志が遠方から言葉に據らず、又電信電話の様な通信に俟たずに、意志自らの力に依て作用すると云ふ事實は最早證明済の事であつて何人も否定する譯には行かない。事實吾々は他の人に向てある事を現はす事が出来る。然らばその動いて輸送されるものは心靈であるのか、抑も亦、腦に眞の幻覺を

起させる作用であらうか、吾々は今この疑問に直面してゐるのである。此際些の先入観念を容れずに、虚心坦懐にこれに對するのが吾々研究者の義務である。そこで吾々は以上述べた様な例に依てこの疑問を解決して見やうと思ふ。

予は今まで右の問題に關係した多くの有益な報告を蒐集したのであるが、中にも特に讀者の感興を惹くと思ふのは印度ボムベ地方の視學官の妻君であるラッセル夫人から知らして來た次の経験である。

「私は親友と一緒にスコットランドに、母と妹達は獨逸に住んでゐた時でした。私は毎年家族の人達に會ひに獨逸に出かけたのです。然るに己むを得ない差間が出来て二年許りは家族に會はずに居りました。或る時急に國に歸つて見たいと云ふ氣になりました。時は恰度春の初めなのです。尤も今までこの季節に歸つた事はありません。俄かの思立ちで豫め手紙で知らしてやる時間ありませんし、又故さら母を驚かす必要もないと思ひましたから電報も打たなかつたのです。不圖、私は全身の力をこめて、妹達の一人に現はれ、私の行く事を覺らして見やうかといふ考へが浮びました。そこで、私は能ふ限りの熱烈さを以て一心に妹の事を考へ、そして私の姿を妹の前に現はしたいと念じてゐました。けれども、この思想を集注してゐたのは十分間以上は續けてゐ

なかつたと思ひます。それは一八五九年四月下旬の土曜日の晚六時頃で、その夜私は汽船リリースに乗つて出發しました。

家に着いたのは次の火曜日の朝六時頃でした。恰度、戸口が既に開いて、部屋まで行かれる様になつてゐたので、誰にも見られないで入つて行きました。その時妹の一人は戸口に背を向けて座つて居ましたが、私の入つて来る足音を聴きつけて私の方を振り向いたのです。すると妹は何故か、宛然死んだ様に蒼青になつて驚いて、手に持つてゐた物を落したのです。私はこの時までまだ一口もきいませんでした。彼女の驚き方には反て私の方が愕いてしまひました。聴て私ははじめて「私だよ」と申しました。そして「何故そんなにびつくりするの？」と尋ねますと、妹は「スタンシエン（も一人の妹）が前の土曜日にあなたを見た様に、私も今、あなたを見てゐるのではないかと思つたからです」と答へました。

それで、彼女の言ふところを聴くと、前の土曜日の六時頃、スタンシエンの居る部屋へ私が戸口から入つて來て、それから母の部屋に通ずる扉を開いて入つて行つたといふのです。彼女は間違なく私が來たと思つたので、私の名を呼び乍ら私の後を追ふて母の所へ行きましたが、私の姿が見えないので、すつかり氣抜けがして、ほんやりしてゐた相です。母は何が何やら一向譯が解

らなかつたのですが、兎に角、皆んなでそこら中を捜して見たのだと申しました。

私を見た妹——即ち私の變怪を見た妹——は私の着いた日の朝外へ出て留守でした。私は階段の所に腰かけてゐて、妹が歸つて私を見たら彼女は何んな顔をするであらうといふ好奇心に唆られました。實際妹が歸つて来て、眼をあげて階段の所にゐた私を見つけた時は、私の名を呼んだ儘もう少しで氣絶しさうになりました。妹は前にも後にもまだ一度もそんな變つた物を見た事はないのです。それ以後私は決して二度と斯様な事をするものではないと、つくづく思ひました。それは私が家へ着いた許りの時に始めて私を見て驚いた妹は、その時の烈しい衝動から遂に病氣を惹き起したからです。

ジー、エム、ラッセル

これは生きた人の幻影を取扱つた問題に立戻つて考へて見なければならぬ事であるが、兎に角、この事件に就て英國心靈學研究會の調査と本文の筆者并にそれを證明した家族の名譽とを對照する時、吾人は聊かもこの話の確實性を疑ふ事は出来ない、他の多くの例と同様に遠方に働く意志の作用を立證してゐる事實である。

次に掲ぐる英國リーズのダブリュー、ダットン僧正の證明した事實も亦、本問題に極めて密接な關

係を有つてゐる例である。

『一八六三年六月中旬の或る日の眞晝中、私がハッダースフィールドの表通りを歩いてゐた時でした。私の親友——スタットフォードシャイヤーの彼の家に今、重病で床に就いてゐる筈の人が、此方へやつて来るのを認めました。尤も彼の病氣だといふ事は二、三日前に友人から聞いたのです。

私は不思議な事に思ひ乍らも、彼は存外早く癒つたのだと許り信じてゐたので、彼の近づいて来るのを待つてゐると、聽て彼は私の傍に来て何とも言ひ様のない悲痛な表情で私を眺めてゐました。そして私が握手しやうとして手を差出すと、彼は一寸もそれに氣を觸れずに又何の挨拶もせず、そのまゝ歩いて行つて了ひました。この奇態な彼の仕打に尠からず面喰つた私は數秒間は唯だほんやりして立つてゐました。勿論最初から彼と一語も交へないのです。そして彼が音を立てゝ歩いて行つたか何うか、また、何んな服裝をして居つたかはよく覚えて居ません。併し私はその時、「君に頼みたい事が澤山あるのに、君は來て呉れない」といふ彼の言葉だけが明瞭に印象されたのです。

驚きからやつと我に回つた時、私は振り向いて彼を見やうとしましたが、彼の姿はもう消えて

了つたのです。私はすぐ念の爲電報で問合せ見やうかと氣が付きしました。けれども矢張り自分で行つて彼の生死を確めた方が間違ひないと考へ直しましたのです。私は何となく彼の死が事實である様な氣がしてなりませんでした。翌日、友の家に着いた時には友はまだ生きてはゐるが、半ば意識を失つてゐました。そして、彼は時々私に來て貰ひたいと言つてゐた相ですが到底生前には會へまいと諦めてゐたらしいのです。

尙ほ種々前後の模様を聽いて見ると、前日私が彼の幻影を見た時刻には、彼は眠つてゐたに違ひありません。そして彼は何處かで私と會ふたと信じてゐた相です。その後、彼は六ヶ月許り存命して居りました。

W、E、ダットン

著者はこの人に他にも幻覺の經驗があつたか何うかを照會したら、唯この一回だけだといふ返事が來た。

上來掲げた磁力、催眠術、心の傳達、自己暗示又は生存者の幻影等の各種の實例は、事實の根本を確め置く必要から引用したものであつて、これ等に就ては後章更に詳しく説明するが、兎に角、精神が肉體組織の上に作用するといふ事實を立派に確證し、同時に心靈と肉體が全く獨立して存在する事

の結論に吾々を導くのである。

更に實驗に依る研究を續ける。

予は先づ、世間の批判的立場から當然起つて來る反對、即ち科學的實驗方法に對する非難から答へて行かうと思ふ。夢や、豫感是谁れでも常に經驗する。併し多くの人は何等の結果も伴はない夢を見る。そして豫感は實現しない。故に適々事實と夢が一致しても、豫感が本當であつても、それは單なる偶然であるとして、換言すれば特に何の價值もない事として考へられるかも知れない。けれども、この反對論が、特殊の感覺、明確な事實、その時の詳しい模様、豫知された變事、或は時々寫眞に映つた様に明瞭に見られた場面等の問題を考へないならば、それは有力な議論とも言へやう。例へば九十四頁に引用したコンスタンス夫人が豫感を受けた結果、幾ら醫師が薦めても鹽酸と間違ひた硫酸を用ゐなかつた事實や、海に溺れたドラウネーや、ユツセー嬢の豫感の場合(九十七頁)や、アルボーソフ夫人の劇的の死や(百頁)。二十八吉米も離れた所で死に瀕して居る母を訪ねて夜中を走つて行つたガリソン氏の場合などには、この反對論は全然適用され得ないのである。吾々の靈的傳達に關する確信は絶對的に特色のある事實それ自身によつて反つて漸次強められて來た。

第六章 隔感現象と遠隔の地に於ける靈的傳達

言葉に非ず！ 事實を！

若し言葉にも、様子にも依らないで働く意志の作用が、心靈の個々の存在の表現であるとすれば、隔感現象や、遠距離に於ける精神的相通も亦同様に心靈の存在を證明するものである。

幾十、幾百、幾千哩の距離を隔て、不意の出来事や、病氣や、死などの事實を、即時に又は突然に知覺する實例は何處にも澤山あつて、今日では心理學的研究が不思議でも何んでもない殆んど通俗的な問題になつた。併も、何世紀の間も常習的に否定し、誤解して來た頑迷な心理學者達は今日も尙残つて居て、依然古い事許り主張して居る。恐らく此處もさうであらう。

予の讀者はよくそれを熟知して居る。この問題に關して予が既往に於て發表した所を再び茲に繰返す事を欲しないが、予は唯だ、以心傳心と云ふ重要な精神現象の在る事を深く銘記して貰へばよい。それは靈の存在を證明するからである。その爲めに、左に二、三の特色ある新しい事件を讀者の前

に紹介するに止める。

拙著「ランコニー」(邦譯「未知の世界へ」)に紹介した「遠距離の地に起る實際の出来事を夢中に目睹する事」に關する章の中で、予は根據ある實例四十七を擧げて、何人も打消し難い證據を提供した事と信じる。中にも、「夢の中で瀕死の叔父を見、又聲を聞いた著述家ビエール、コニルの有名な經驗」。「マルセーユへ歸航の途中、船の中で頭の血みどろになつた弟の姿を見た船長の話」。「自分の父母を乗せた船を技師バルメロが見た話」。「マルタン、ハルル氏が遠方にゐた未知の若い娘の窓から壁ちたのを見た話」。「醫師クロツケー氏が夢に痾を見て實際にそれを手術した話」等は特に顯著な例である。要するに、これ等の遠感的現象から夢中或は睡眠狀態の下に遠距離の物象を確實に見取る事が出来るといふ結論を得た以上、更にそれを敷衍して茲に詳述する必要はない。吾々は又、コンティ女王が夢の中で別室に寝てゐる王子達の上に將に壁が崩れやうとしてゐる所を見て馳け付け、危境から救ひ出したといふ有名な話を讀んだ。

茲に前述の話を一層確實に裏書する出来事がある。それは起きてゐる人と寝てゐる人の間に起つた極めて珍らしい實例であつて、今はラ、ロシエールに隱居して居る海軍官吏ア、ダルジー氏から、一九〇四年八月に慇々送られた報告である。氏の希望に依て當事者の名前又は秘する事にした。

S夫人は一八八七年には家族と共にウアンデに住んで居た。彼女は前からT氏と許婚であり熱烈な相思の仲であつた。そして二人の間には繁く文通もしてゐた。

「或る夜十一時近く、S夫人は絶望的な聲に目が醒めた。聲はすぐ聴き分けられた。そして顔に息を吹きかけられた様にさへ感じた。彼女はそこに誰かゝゐるとでも思つたのか、機械的に手を伸ばしてその人を探した。

後は何の感じも起らない、また何も見えなかつた。そして何の原因やらも推量が出来なかつた。けれども彼女は何となく怖ろしさに堪へなくなつて、別室に寝てゐた母を起しこの錯覺の話をした。同時に彼女はバスビレネー縣の遠い田舎の方で、恰も今、何等かの不幸な事が起つたやうな強い豫感に打たれた。夜の明けるのを待つて彼女は許婚に宛てゝ手紙を出した。その返事は來なかつた。續いて出した手紙も同様であつた。そして數ヶ月経つても彼から何の便りもなかつた。ある日S夫人は偶然に、その愛人が田舎町に重大な疑獄事件の發生する事を防ぐ爲めに責を一身に引いて即夜投獄されたといふ事を聞いた。そしてこの不幸な男に附いてゐた醫師の話に依ると、萬事休した事を覺悟した彼は極めて絶望的な聲を擧げて彼の許婚の女の名を呼んだといふ事を證言した。

斯くして二人の關係はその儘永久に斷たれた。後、T氏は他の女と結婚したが、三、四年前に死んだ。

アルジー

この生きた人の間に於ける心靈相通の現象で慎重に觀察された事實は彼のウィルモー夫人が、家で寝てゐる間に航海中の夫を訪ね實際其處に到着した話。〔未知の世界へ〕四九五頁参照〕を始め何百といふ同じ種類の例がある。

著しく距離を隔つた二人の間にも同じ様な遠感的事實の現はれた場合に就ても、注意深い觀察家に依て随分澤山の報告が予の手許に集つてゐる。その中から一、二を次に引用する。

それは現に巴里大使館に勤めてゐるウオアリングトン、ドーソン氏から寄せられた報告で、當時氏は巴里新聞の亞米利加係を担当してゐた。(一九〇一年十二月三日附)

「私は非常に珍らしい遠感現象の例を貴下に御報告する。それは最近私自身に起つた事で、多少なりとも貴下の御研究の参考になる事と思ふ。

去十月八日(火曜日)に私はフェード街十八號の事務所で貴方の若い同僚である婦人天文學者クルンプク嬢の事に就ての記事を書いて居つた。その時、この編輯に必要な以前彼女を訪問した

時の記事がないので一時筆を止めて、色々考へた結果、この記事がウアレンヌ街三十六號にある私の室の机の抽斗にあつた事を想ひ出したので、直ぐそれを取りに歸つた。私は例もの通り帽子を入口の部屋にある卓上に置いて、私の部屋——中二階の上四階目——に上つて行つた。その時私の室は少しも整頓されてゐない、全く打つ棄り放しになつてゐた。尤も初の留守中其處には家政婦が居つた様子も見えるが、彼女は少しも部屋の整頓はして呉れないのだ。「私は駄目だなあ」と獨りで呟いた。それから、母がもう餘程前に巴重に歸る筈であつたといふ事から、母が居つて呉れたら恠んな不爲體な事はなかつたらうと云ふ様な事を考へ乍ら自分の仕事部屋へ行つた。そして、私は暫く書類やランプの載せてある私の机の前に坐つて居た。それは確かに八日の午後二時頃である。クルンプク嬢に關する記事を亞米利加に送つたのも矢張八日であるから上記の日附には無論間違ひはない筈である。

次の週、亞米利加の母から手紙を受取つた。それには意外にも今述べた様な、私の失望した部屋の有様が明瞭にデョーシ、コーファン夫人に見えた事が認めてある。是には私は驚かすには居られなかつた。

母の手紙には紐育の十一月十一日の日附がしてあり、消印も同日であつた。つまり前記の室の問題があつた日から恰度三日目に出したものである事は言ふまでもない。巴里から紐育には早くも八日費かる。海底電信でない限りは三日以内に出来事の分る方法はない。と言つてまさか恠んな事に一語一法二十五サンチムの高い電報料を拂つたと想像する人もあるまい。母はこの手紙を十月十一日の金曜日にコーフトン夫人に會つたと書いてあるから、それは九日になる譯である。そして夫人が紐育の時間で午後二時に私を見やうとしてゐたとすれば、その瞬間に於ける私の巴里に居る動作を見るべきであるのに、午後二時前の私の事を見たといふのは奇妙な現象であると思ふ。

御覽の通りこの手紙はコーファン夫人が私の部屋の事から叙べて居るが、私の部屋はまだ一度も寫眞に撮つた事もなく、殊にコーファン夫人が歐羅巴から歸つて以來始めて母に會つて、その數分後に私の室の説明をしたのだから彼女は室の模様などは豫め知つてゐる筈はない。

尙、巴里では中二階以上は改めて一階、二階と數へて行く習慣になつてゐるので、母が四階と言つたのは巴里の流儀であつて、紐育で云ふ七階である。夫人が階と當てた理由もそれで分る。又私は年中その時刻に自分の家へ歸つた事は唯だ一回ある様に覺えて居る。その上、コーファン夫人は亞米利加にはまだ知られてない磁器のストロープが私の室にあると立派に言ひ當てゝ居る。

兎に角、夫人は斯かる遠距離から私の室内の様子を正確に透視したと云ふ事は些の疑ひのない事實である。

私の家族は長い間コーファン夫人と交際して居つた。そして或る時は身内の者に起つた出来事を見て貰つたり、或る時は紙片に何か書いて置いて夫人にそれを當てさせたりして興がつてゐたのであるが、彼女は何時も明確な答を與へた。

フランシス、ウオアリントン、ドーソン」

(其後、夫人は英國の天文學者イザック、ロバーツと結婚した。)

この手紙と共にドーソン氏の母堂からの十月十一日附の手紙も添えてあつた。それにはコーファン夫人の言つた通り、巴里の六階の部屋、ドーソン氏がこの部屋に來た事、召使がゐないので當惑した事。彼が帽子を卓上に置いた事。書類の搜索、書櫃の様子、そして彼がその机の前に座つた事まで詳細に書かれてあつた。

この遠方からの精確な視力は全然自發的なもので、又絶対に爭ふ事の出来ない事實である。けれども、唯だ不思議なのは視力が前日に溯つたのであつて、その日の瞬間に行つたのではない事である。即ち時間と空間とに於ける隔感の二重現象を表はして居る。

要するに生きて居る人の間の以心傳心の相通はこの種の現象の経験がない人から想像する様に罕れな事ではない。

茲にも面白い例がある。これは今、英國サレー州のサットンに住んでゐる海軍中佐T、W、アインスバリー氏から一八八二年十二月に送られた書信である。

『私は十三歳の時、ジャバ島の西方バリ島に這入らうとしてゐた船から落ちて、辛くも溺死を免れた事があつた。その時私は暫く海中に沈んだ後で再び水面へ浮び出ると、すぐ「母さん」と呼んだので、救助に來た乗組員達は、當時興がつて私を擲擲つてゐた。數ヶ月の後私が英國に歸つた時、母に向つて、

「私が水中に沈んでる間に貴方達がこの部屋に居るを見ました。お母さんは何か白い物を縫つてゐた。それからエミリーさんも、エリザさんも、エレンさんも皆其處にゐました」と、當時の話をすると、母から

「お母さんもお前が呼ぶのを聞いたよ、それでエミリーに窓の外を見て貰つたのだ」と言はれた程度之差を考へると私の出来事と、母が私の聲を聞いた時刻とがよく一致して居る。」
尙中佐の他の手紙には更に詳しく説明してある。

「私は母や姉妹達の顔、部屋の様子から家具の模様、それから古いヴェニス風の日除けなども見た。姉が母の側に座つてゐた。」

時間は判然^{はつち}覚えてないが、早朝の事であつた。前日顛覆した帆船が岸に打上げられたのはよく記憶して居る。士官がその船を曳いて来る様にと命令した事も記憶に残つてゐる。實際危ない所であつたが、私は當時、子供心にそんなに怖ろしい運命が迫つてゐやうとは少しも考へてなかつた。けれども、その時の事は深い印象となつて未だに忘れる事が出来ない。又、水兵が「坊ちゃん！ なぜお前はお母さんと呼んだのか？ 悪魔の爪からお母さんに助けて貰へるとでも思つたのかな」とからかひ半分に言はれたのも耳に残つてゐる」

念の爲め中佐の姉妹に照會すると、次の返事があつた。

『私はあの出来事をよく思ひ出せます。私共が座つて靜かに仕事をしてゐた時でした。『お母さん！』と云ふ微かな叫び聲を聞きました。皆んなに聞えたのです。お互に眼を見張つてゐると、又「お母さん」と呼ぶのです。二度目の聲は如何にも恐怖で押へられてる様な、そして苦悶の叫びの様に感じられました。私共は思はず總立になつたのです。母は「戸口へ行つて、何んだか見て來て御覽」と申すので私はすぐ往來へ出て數分間捜して見ましたが何も見えません、微風さへな

い靜かな夜でした。母はこの出来事ですつかり驚いてゐました。』

これ等の生存者の間に起る思想の傳達と云ふ事は日常吾等が経験してゐる様な五官の作用に因て爲さるゝものとは全く違つたものであつて、それは凡ゆる證據が明示してゐる様に其處に働くのは心靈である。

恚うした實例は幾らでも引用する事が出来る。その中には一人の女丈夫が門欄を開かうとして餘りに身を屈け過ぎて馬から落ち、その時の叫び聲が七吉米も離れた遠方の五人に聞えたといふ話もある。

予は親切な婦人達から、キリスト教の教理を無視して、遠距離の靈感とか死の知らせとかと稱へる滑稽な話を眞面目に認めてゐるのは不都合だと云ふ詰問の手紙を受取つた。それは大方坊さん達に吹込まれた結果であるとは想像されるが、中にもサランの婦人の手紙の如きは随分思ひ切つた罵倒を極めたものである。その次に來た手紙（九一三信と九一四信）も同じ郵便で着いたのであるが、この二つは互に矛盾してゐる事があると思へば不思議にも互に補足し合つてゐる所もある。

九一三信は「以心傳心など、云ふ精神現象は凡て虚偽です。斯かる事を眞面目に承け入れてゐる貴方は殆んど狂氣の沙汰であります。私はこの上貴方のランコニー（未知の世界へ）を読み續ける氣持

にはなれません。それ程此の本は馬鹿氣た書き物です、本當に奇怪な本です。」と相當に猛烈な書き方である。又、九一四信には、右と反對に、

「貴方が豫て研究されてゐる問題、即ち未來の科學の基礎に關する貴著ランコニー（未知の世界）に對して御參考までに卑見を申述べる事は私の義務と存じます。

一八七八年の冬に私はオーレヤクに住んでゐました。そして妻と娘はイル、エ、ヴィーヌのサン、セルバンに残して置きました。

十二月二十二日午後八時半頃、私がカフェーに居つた時、一種異様の堪へ難い苦悶に襲はれました。私は何かの豫感らしく感じたので、家へ歸つて次の様な手紙を妻に書きました。

「私は例もの友達と一緒にカフェーに居ると、私は悲し相なお前の呼び聲を聞いたので、何となく氣になつて、友達の留めるのも聽かずに家へ歸つた。屹度お前は何かで苦悶して一生懸命に私を呼んだに違ひないと思ふ。さもなければ非常に危険な事でもあつたのか。詳しく知らして呉れ。私は何とは知らずに苦しみに堪へないで家へ歸つた。これをお前に知らせずには居られない。」——十二月二十二日、午後九時。（以下本書に關係ない事であるから異す）

妻は二十四日の朝この手紙を受取つた。そして直ぐ返事を寄越した。彼女は先づその手紙の冒

頭に「子供に大變な事があつた日」と書いた。

以下サン、セルバンでその日起つた出來事です。

二十二日の午後八時頃、妻は生れてまだ六週間にしかない私の娘の足の所に湯タンボを入れてやつて寝かし、妻も後から床に這入りました。二、三分すると子供は突然苦し相な聲を張りあげて泣き出したのに驚いてよく見ると、瓶から熱湯が漏れて子供は無慘にも足に火傷をして苦しんでゐたのです。

妻はこの有様に仰天して殆んど氣を失ひ、三十分以上の後で、醫者が來た時にやつと正氣に回つた程でした。

私の手紙の日附は十二月二十二日午後九時であるから事件の時刻と恰度一致してゐる事が確かである。

私が前記のカフェーで食事したのが七時と八時の間で、それから歌留多を弄んで間もない時分ですから、呼聲を聞いたのは早くも八時半頃と思ひます。そこから私の部屋までは一五九米突あります。

子供は八時に床に就かせたので、湯漏れが八時半過ぎであるとする、その頃は太ふ冷めて來

るので、火眼にならずに済んだ事でせう。恐らく妻は混亂中に私の事を考へ出して呼んだのだと思はれますが、彼女は一向それを記憶して居ません。

終りに私は、自分の性質と職業の上から、單に心靈界の不思議な現象丈の研究に止らず、進んでその科學的眞理の研究に向て多大の趣味を有つてゐる者であるといふ事を附け加へて置きます。

ギゴン』

この珍らしい話はアルボーソフ(第四章)及びガリソンの話(同章)に極めて酷似してゐるではないか。これもすべて超自然的心靈の力の表現である事は言ふまでもない。

茲に亦、思想の遠感的傳達を示した最も明確な若干の實例がある。その中から巴里大學のボアルソン博士の報告(三四八二信)を紹介する。

『私は茲に自分の經驗した幾分性質の違つた三つの場合をお知らせする。それは貴下の研究の上に有益な參考にならうと信するからである。

(イ)二ヶ月許り前、巴里郊外ベルフォール附近を逍遙してゐる時、不圖、ジュラに居る同僚の或る一人の事が心に浮んだ。それが奇妙に執拗くく附け纏ふのである。

私は十三年前から彼を知つてゐた。けれども職業以外には彼と何の交渉もないので、その後彼と會つた事もなければ、年に一回も彼の事を考へた覚えもない。何の爲めに今、偶然彼の事を考へ出したのか自分にも分らなかつた。更に不思議な事には、それから二、三分すると、廣場で、彼が直ぐ私の近くに居るのを見つけた。彼は自轉車で私に直角に町を降りて行つたのであるから、彼が遠方にゐた時分には私から迎も見えない筈である。私はこの理由を説明する事は出来ないが、兎に角私を感動せしめた事實である。

(ロ)私は職業柄夜間屢々起される事がある。尤も私に關係のない人が大勢私の家の前を通る。けれども自分の家のベルを鳴らさうとする人が来る時にはその人がまだ二十米も離れてゐる時から私は自然と眼が醒める。誰か来るなと云ふ事が分るのである。

私はこの現象を過去十二年に百回餘も經驗した。唯だ、私が醒めてゐる時、又は晝の疲れでぐつすり寝込んでゐた時だけは誰れが来やうと少しも知らずに居る事を特に御斷りして置く。

(ハ)私の取扱つてゐる多くの患者の中にはヒステリーの若い婦人があつた。そして、この婦人を催眠術で眠らせ、暗示を與へる事は極めて容易である。私は屢々彼女の目覺める時と、起きる時とを定めた。彼女はよくそれを守つた。これは多少催眠術を心得てゐる人には不思議でも何ん

でもない事だが、唯茲に一寸面白い話があつたといふのは、ある日この婦人の夫は妻の起きるのが待ちきれないで、ほんの氣紛れから彼女の寢臺の側の卓上に在つた時計の針を進めて置いた。その時は午前六時半であつたのを七時半の所に進めたのである。彼女は七時に起きる事になつてゐた。然るに長針が丁度七時を指した瞬間に彼女は急いで起き上つた。男は驚いて態々この話を私に知らせにやつて來た。それから私は幾度もそれを確めて見たが、矢張り本當であつた。

この婦人は寢てゐる時でも、眼を閉ぢたまゝ私の時計の時間を讀む事が出来る。私が自分で時計の針を見て居さへすれば、たとひ時間を變更しても間違ひなくそれを讀む事が出来るのである。それと同じ様に私が自分で物を持つて居る限り、彼女に隠れてゐても、彼女はその物の名を容易に當てる。

これ等の現象は凡て説明され得る事實である。それは一般の人々には分らなくとも、たとひ人々には魔法使の様に思はれても、豫て心靈學上に造詣の深い貴方には容易に解説され得る事と思ふ。

貴下はこの報告を如何様に利用さるゝも御隨意である。又、小生の名を發表されても差支はない。小生はこの方面に無智の人々から受ける嘲笑を反て喜んで迎へる者である。

一九一六年十月九日

醫師 ボアルソン

右の中最初ものは珍らしくない現象である。それはエーテル波の様に腦から腦へと思想を傳へる場合の一つである。二番目のものも同様である。三番目のものは手段によらず作用する暗示である。思想の傳達である事は言ふまでもない。殊に醫師が時計の針を變へた場合などに於てはさうである。又、自分が考へてゐた人と全く偶然に會ふ事のあるのは誰でも知つて居る。吾々は慙うした例を到る所で見える。醫者のフォアサツク氏はこの種の例で特に彼が自ら驚いた暗合の場合を擧げて居る。けれども此の現象に就ては今日まで未だ本當に研究されてはゐないが、心靈の放射作用である事は殆んど疑ひがない。

遠感的透視力や、聴力には一層著しいものがある。

次はトブリーの醫師バルター未亡人からの報告で、それは幸ひに大事に到らなかつた事件を遠距離から見たと云ふ例である。時は一八七四年、所は羅馬尼亞で起つた事である。(四〇七五信)

『醫師は馬に乗つて往診に出かけました。妻君も午後には二、三の友達と外出したのです。彼女は道々友達と話し合つてゐる最中に、俄に彼女の夫が馬から道に放り出されたのを見てあつと恐怖の叫びを擧げました。友達は彼女を囁ひました。夕方夫が歸つて來た時、まだ幻の印象がはつ

きり残つてゐた妻は、怪我がありませんでしたかと尋ねたので、今度は夫が驚きました。事實、彼はこの日稍々急な坂路を登つた後で、馬の歩みを緩め、手綱を腕にかけて煙草を巻かうとする途端に馬は躓いて膝をついたので、彼は地上に振り落され、顔や肩に負傷したのである。豫て遠感現象の事を知つてゐた彼は決してその話を否定しなかつた。

左に掲ぐる幻想の例はロンブローゾ氏が、大學の同僚ド、サンクテイス教授から送られた報告である。

『私は今、田舎に残してある家族と一緒に曾て羅馬に居た事がある。それから一年許り前に弟が強盗に遭つて以來夜だけ私の家に寝る事にした。或る晩、彼はコスタンチ劇場に行きたいと言ひ出したので、私だけ家に残つて書物を読み始めた。すると何やら一種異様の恐怖に襲はれた。ふと劇場が焼けて弟は今危険な所に居るのではあるまいかといふ考へが湧いて來た。けれども私は強てその恐怖を押へて、着物を脱ぎ例もの通り燈を消して床に入つたが、何うしても不安が先に立つて眠れなかつた。十二時半頃門が開いて弟が歸つて來た。彼は觀劇中に火事が起つて非常に怖ろしかつた事を告げられた時には私も餘りの不思議に驚いて了つた。その時間も私が恐怖に襲はれた時刻と恰度一致してゐた。』

キンタール博士がアンチエルの醫學協會で發表した報告は思想傳達の顯著な例である。

『ルドビコと云ふ七歳の小兒は、彼の有名なイナウヂの様に何んな問題でも解く奇才を有つてゐたが、ある日この兒の父は、この小兒をして解かしめやうとする問題を當の小兒が殆んど聽いてゐない事と、母が其處に居なければ小兒は問題を解き得ない事を發見した。

つまりこの小兒に問題を解かしめる爲めには母はその答を見てゐるか又は心中に有つてゐなければならぬのである。この事から父は、子供が推理するのではなくて、推測するのであるといふ事、言葉を換へて言へば、子供は母の心を読むのだと考へついた。そこで彼はそれを確める爲めに妻をして辭書を開かしめ、母が今、何頁を見てゐるか子供に尋ねた。子供は即座に四五六頁と答へた。十回も同じ様な事を繰返したが何れも間違ひはなかつた。

斯様な原因から、或る文句でも一と通り母の眼に入れば子供は誰れに問はれても、すぐ答へられる譯である。』

凡てこれ等の觀察は、心と心との間には相通する何物かの存在を吾々に證明するものである。夢の中で、遠距離の物を見たり、聞いたりする事の例に就てはモーリス、ローリネー氏から知らせて呉れた。それは氏が瑞西のフリボルグ縣ドムデイデールの牧師タツツ氏から得たもので、次はそ

の概略である。

「一八五九年十一月の中旬、私は當時十八歳の青年であつたが、一夜、床に入つて寝てゐた。

夢の神が何時間前から私を揺すぶつてゐたかは知らないが、私の心に不思議な幻影が現はれた。私は年寄つた父の悲し相な顔を見た。父は私の住んで居るフリーボルの近くの町から二十四吉米も離れてゐる田舎の古い家から、「愛するヨセフよ！　今、父はお前の妹のヨセフィンが巴里で死にかゝつてゐると言ふ悲しい知らせをお前に向て書いてゐるのだ。」と話された聲に眼が覺めた。私はその時、「あゝ夢でよかつた」と獨り言を言つて再び寝つて了つた。すると又、同じ幻が現はれ、「愛するヨセフよ！」と言ひ出して前と同じ事を繰り返した。そして最後に「お母さんはこの悲しい出来事を知らないのだ」と附け加へた。

私は驚いて床から飛び起きた。そして、「何うやら唯だの夢ではない様だ」と考へた。兎に角、着物を着て時計を見た。丁度十二時半であつた。

翌朝、私は大學へ出かけた。所が、少し忘れ物に氣が付いたので、再び自分の部屋に戻つて來た。是時向ふから室を監督してゐる門衛の爺さんがやつて來て、私に何やら小さな包を渡して、「今し方貴方の郷里から來られたと云ふ立派な紳士が見えて、これは貴方の父さんからの大切な

御手紙が入つてゐるのだから、貴方が歸られたらすぐ渡して貰ひたいと被仰つてお歸りになりました」と云ふ。私は大急ぎでその包を開いて見ると、父からの走り書きの手紙が入つてゐた。「愛するヨセフよ！　お前の妹のヨセフィンが今、巴里で死にさうになつてゐる。この悲しい知らせをお前に知らさなければならぬ。お前の母はまだこの悲しい事を知らないでゐるのだ。電報が來たのは今晚十時であつた。その時私はこれをすぐお前の母さんに知らしては可くないと思つた。今は十一時だ。間違ひなく明晩此處へ來て呉れ。私はこの老齡では迎もこの悲しい勤めを果す事は出来ない。お前が代つて行つて貰ひたい」と。

右の記述に間違ひのない事を誓言する。私は尙昨日の出来事の様子に記憶して居る。

一九一八年四月十八日、ドンデにて
牧師　ヨセフ、ドータツツ

夢と現實との一致を論證する事は、此處では未だ不可能である。この場合は息子に向て書かんとした父の思想がすぐ傳はつたものと認容する外はない。

凡てこれ等の事實は何れも心、靈の作用は肉體と獨立して存在するものであると云ふ事實を立派に裏書して居るのだ。

次はフオアサツク博士が自身に起つた遠感的現象の経験である。實際この種類の事は當時に於ては

餘り注意も拂はれてゐなかつたのである。

『私がまだ醫學研究生としてドビューレンの病院に助手をしてゐた時であつた。一夜、私は父が病死した父を見て、堪らない苦しさを感じた。前の日曜に會ふた時には父は丈夫で居つたので、餘りこんな事に懸念するのは自分の意志が弱いからだ、自分で氣を取り直さうと思つて見ても、瀕死の父の姿が絶えず心に浮んで來て私を苦しめた。そこで念晴らしに出掛けて見る氣になつてサン、ジェルマンへ行くと、果して父は肺炎を起して寝てゐた。それから五日後には遂に此の世を去つたのである。』

遠感即ち以心傳心的現象はあらゆる形で現はれる。毎日の新聞からもこの種の觀察の反響が尠なからず見出される。中にも、一九〇六年八月二十三日のデーリー、テレグラフに見えた一通信員の娘の話などは一寸面白い現象である。それは三つになる娘が毎晩皆んなと一緒に祈禱してゐたが、ある晩、彼女は露西亞から英國に向つた祖母の爲めに航海の安全の祈禱を拒んだ。彼女は「祖母さんは今着いたのだから今晚からお祈りしなくてもいいのよ」と再三繰返して言つた。そこで「なぜお前は今夜に限つてそんな事を言ふの？」と聞くと、娘は極めて眞面目に「え、私は祖母さんの乗つたボートが港に着いたのを見たもの」と答へたので、通信員は念の爲めにその日を書き留めて置いて、後

で母からの通知と照して見ると、事實、子供が祈禱を拒んだ晩の前日に祖母が無事に彼地に着いたと云ふ事が分つた。つまり子供が夢で彼女の安着を見たのである。この通信員はその妻君も矢張り遠感力を有つてゐたと云ふ事を述べた。それは或る夜、彼女は汽船「グレート、イースタン」號の甲板上で爆發が起つたのを夢に見た。彼女の夫はそれを聞いて大に笑つたが、翌朝の新聞を見て始めて驚いたといふ事である。

ストラスブルグから巴里までの夢中に於ける遠感的透視力の實例に就ても、舊友ドベルマン夫人から次の様に知らして呉れた。

『先生、私は一九〇一年一月に經驗した遠感の實例を御報告致します。私共は以前から巴里に居りましたが、その年の一月末に母の葬式を営む爲めに私共夫婦はストラスブルグへ呼ばれたのです。この地は私共に取つては殊に思ひ出の多い所で、それに着いた日などは空には一面に雲が渦巻いてゐました。怱うした環境から更に深い印象を受けた私は、その晩から種々な夢に襲はれました。或る晩などは私は激しい苦しみ感じて、私の一番小さい子供の上に二枚の板が落ちて來て、それに挟まれて出られなくなつた子供は苦し相に「お母さん」と私を呼んだ夢を見たのです。姉にもその事を話しましたが、その後は二人とも別段氣にも留めないでゐたのです。二三日

してから、私共が巴里に歸つて來ると、迎へに來た召使が、「ジュリアンさんは大變よくおなりになつて、もう仕事してお出でゝす」と言ふので、私は「一體何うしたと云ふのだ？ 病氣にでもなつたのか？」と尋ねますと、召使は反つて驚いた様子で、「まあ！ それでは少しもご存じなかつたのですか？ あの方はお留中に足に怪我をなさつて數日の間、家に引籠んで居られたんですよ」と答へました。

息子が歸つて來てから詳しく訊きますと、頭の上に積み重ねてあつた板が、ふとした機みで落ちて來て少し許り怪我したが、大した事でもないで別にお知らせもしなかつたのだと云ふ事でした。そこで私はストラスブルグで見た夢の事を話し、そして「不思議な事には、その怪我した場所がお前の工場ではなくて、今まで餘り見た事のない工場でお前が板の間に挟まつて中々抜出るに困難してゐる様子であつた」と告げますと、息子は「全くその通りで、場所は隣りの工場でした」と答へました。それから、その日は晴天であつたと言ひました。唯だ、自分がお母さんと呼んだか何うか、それ文は記憶してない相です。

息子は夜寝てゐる中に私を呼んだのでせうか、彼はよく夢を見て呼ぶ事がありますから、そんな事もないとも限りません。但し斯んな暗合の例は今まで一度もなかつたのです。

巴里にて バラリー、ドベルマン

吾々は既にこれ等の眞實な、卒直な、そして正確な話が如何に千種萬様な形を成して現はれるものであるかといふ事が分つた。同時にそれは吾々の肉體は凡ての眞實を含んでゐない。換言すれば肉體では總ての眞實を認める事が出来ない、と云ふ事を明かに證明して居るのである。

茲に又、遠方に起つたある事件を極めて精細に夢中に見た一例がある。

それは著者の親戚の一人イゾアール夫人——マルセーユの人で、一家と共に五十年以上も其處に住んで居る——に起つた事で、彼女はこの奇妙な夢に就て私に詳しく話して呉れたのだが、更にそれを簡略に書て欲しいと頼んでやつたら次の様に答へて來た。(二二〇二信)

「私がマルセーユに居つて、ボークルーズ縣の田舎町ソルグにゐる私の友達が、一人の男に捉へられ、美しい髪を斬られてゐる夢を見て驚いて起き上りました。

二三ヶ月後、この婦人が病氣の爲めに本當に美しい髪を斬られ、その上、頭を残らず剃られて了つた事を聞いたのです。そして夢と事件とが同日同刻であるので、私は未だによく記憶して居ります。

イゾアール

精神には距離と云ふものが存在しない。そこで、見た人の心靈が見らるべき場所へ送られるのか、或は、見られる人が遠方に在る見る人の方に作用するのか、抑も亦、兩方から同時に感應するののかといふ問題が起こる。併し、思想にとつて空間とは一體何を意味するものであらうか。

或る事件、病氣、死などを遠距離から見ると、この種の経験のない人々が考へる程に爾く率れな現象ではない。吾々はこれから更に正確に死を見た多くの場合に就て研究を續けて見やうと思ふ。次の觀察の如きは遠感と關聯した現象である。(クロヴェー夫人著「自然の不明瞭な側」から引用した。)

「H夫人は數年前ネリー、ハンロンと云ふ召使を雇つた。彼女は極めて忠實に働く婦人で休みなを要求することは滅多になかつた。それで、夫人も出来るだけ彼女を優待して使つてゐた。或る日、ネリーは珍らしくも數哩先の町に行つて見たいから一日の暇を貰ひたいと申出た。夫人は勿論それを許す積りでゐた。然るにH氏が歸つて来て、ネリーの申出を聞くと、それは困ると言ひ出した彼は恰度その日に客を招待する事になつてゐたのだ。彼女が居なければ非常に差聞へる。殊に彼女の外には地下室の鍵を預ける者がない。一人で客を接待したり、酒の番をしたりする事が出来ない」と云ふのが彼の不賛成の理由であつた。けれどもH夫人はネリーを失望させるのを氣の毒に思つたので、夫人自身がその役目に當る事にして、兎に角彼女の願を許した。ネリー

は大喜びで、なるたけ今晚、遅くも明朝は歸りますと言つて出掛けて行つた。

その日は何事もなく済んだ。誰もリネーの事を考へなかつた。轉て葡萄酒を出して来る時間になつたので、H夫人は鍵を持ち、他の召使に籠を持たして地下室に下りて行つた。梯子段に足を下した刹那、突如、夫人は大きな叫びを擧げて倒れ、そのまゝ寢臺へ運ばれた。夫人に跟いて行つた女中は他の朋輩に、「階子段の所にネリー、ハンロンが満身びしよ濡れになつて立つてゐるのを二人で見ました」と怖ろし相に語つた。H氏は召使達を馬鹿だと叱つた。H夫人は手當がよかつたので、間もなく少し意識を回復した。そして眼を開くと彼女はすぐ「あッネリー、ハンロニー」と叫んだ。それから全く正氣に回つて、話が出来る様になると、夫人も亦女中と同じ事を言つた。夫人は梯子段の下にネリーが今水から出て来た許りの姿をして着物から雫を垂らして立つてゐたのを見たのだと語つた。H氏はそれは必度錯覺に違ひないと幾ら夫人を諭しても、彼女は聽かなかつた。終にH氏は「今にネリーが歸つて来て、お前を喰ふだらう」と言つた。

夜になつても、翌日が來てもネリーは歸つて來なかつた。二、三日過ぎてH氏も漸く不安に襲はれて來たので人を方々に出して搜索した結果、市場へ來て、夕方頃歸途についた事までも確めたが、遂にネリーの行衛は分らなかつた。彼女の死體が河の中に發見されたのはそれから隨分經

つた後の事である。けれども未だにその死因は疑問となつて残つてゐる。』

召使の幻影が夫人の前に現はれたのは、その遭難と同時にあつたに違ひない。即ちネリーが常住敬慕してゐた主人の所へ歸つて來たのであると想像するのは必ずしも理由のない事ではない。兎に角、この遠感的觀察は正確と明瞭な點に於て特に注目すべき價值あるものである。

遠距離に於けるこの種の精神的視覚は、初めは一寸解らない象徴的な形を取る事がある。自分は巴里から二四〇吉米離れたベリーで起つた夢について次の手紙を受けた。(六七二信)

『八月二十九日から三十日にかけての夜、私の若い友達で、五年前政府の役人と結婚してその當時紐育に住んでた人の夢を見ました。私は夢でその若夫婦の室にゐました。彼女は寢巻を着て、髪を背に垂れ、眼には一ばい涙を漂はせて子供を抱き乍ら立つてゐました。そして、その子供の頭や胸は痛く瘠せ衰へて苦しうに泣いてゐました。この時私は二人の男が何やら大きな物を持て來て室の真中に置いたのを見ました。最初、それは子供の棺の様に見えたので、子供はまだ死なずに母の手にゐるのだなと思ふと、何が何やら一向分らなくなりました。暫くすると、棺が段々大きくなつて、終には大人の身體を入れる事が出来る位になりました。間もなくこの二人は白布で包んだ長い死體をその棺の中に入れたのです。』

若い妻は前にも増して吸り泣いてゐました。彼等は彼女の一方の手を取つて棺と共に後の方に押し出さうとしてゐたのですが、彼女は激しく抵抗して行く事を拒んでゐました。その中に子供も、家族も消えて、室にはこの世に二人とない愛人の亡骸と彼女丈になりました。

多くの夢と同じ様に、私の夢の終りは混亂して了ひました。眼覺めた時には唯だ限りのない痛々しい印象が残つてゐるだけでした。私は室内の掃除を手傳ひ乍ら、下女に昨夜の夢の話をしました。下女は私の友達をよく知つてゐるのです。

翌日、即ち九月一日の朝、私の夫は悲しい知らせを持つて部屋に入つて來ました。それは三十六歳になる友人の葬式の通知でした。夫が吃り勝にそれを読んで呉れた時、私は何とも言へやうのない感に打たれました。友人は一八九二年に巴里に流行した怖しいコレラに罹つて、八月三十日の朝四時と五時の間に死んだのです。

この病人が到底恢復の望みないと宣告された時、若い妻君は、せめて友の醫者(私の夫)が居つて呉れたなら或は夫を救ふ事が出来たかも知れないと考へてゐたといふ事でした。

誰がこの不思議な一致を説明出来ませうか。實際私は心の中で友人が棺に入れられたのを見たのです。そしてすべての事が私の既に述べた通りだつたのです。

一八九九年六月六日

斯様に種々の確實な、そして極めてよく一致してゐる経験を前にして、而かも吾々は尙ほそれを認容しない譯にいかうか。

予は尙以心傳心的視覚に關して伊太利の通信員エヂスト、デル、パント氏から前者に劣らない程珍らしい報告に接した。(一、〇二三信)

「或る日、ツールーズからバリ迄汽車に乘りました。その時、私と同じ仕切の中には大層目立つた風采をした中年の紳士が居りました。間もなくその紳士と話を交へる様になつて、哲學や、社會主義や、宗教の事まで語り合つてゐる中に、彼は數年前の怖ろしい不幸から今は非常な信仰家になつたと云ふ事まで聽きました。

彼の話に依ると、彼の全家族はツールーズの大洪水の時に溺死して了ひ、それから數日後に、彼の夢に溺死した子供の中の一人の死體が或る所の水の下に横はつてゐる姿を見たので、翌日その場所に行つて見ると、夢と同じ場所に本當に子供の死體が発見されたのだと云ふ事でした。私の見たこの紳士は、話し振りが、態度から何處かの立派な教授でもあらうと思はれました。彼はこの悲惨な自分の不幸に就て見知らぬ人に話したのはこれが最初だと言つてゐました。私は斯様

な教養ある紳士が涙ながら嘘を話したとは如何にしても信じられません」

茲に又、夢の中で頗る變つた事件を、而かも遠隔の地で見た面白い例がある。(「生存する者の幻影」より拔萃)それはウインチェスターの中央寺院の僧職ワアバートンが一八八三年七月十六日の日附の下に書いたもので、左にその梗概を掲げる。

「私は當時辯護士をして居つた弟のアクアンワバートンの所で一、二日滞在する豫定でオックスフォードから出掛けた。そして彼の家に着いた時、彼から私に宛てた手紙が卓上にあつた。それには今晚ウエスト、エンドの舞踏會に行くが、一時頃には歸つて来るから、それまで待つて貰ひたいと書いてあつた。私は安樂椅子に横になつて暫時の間まどろんだと思ふと、私は驚いて眼を醒まし、あッ！ 弟が墜ちた！ と叫んだ。弟が應接室から明るい舞踏室へ出て行く途中、梯子段の第一段から足がからんで眞逆様に墜ちて、肘と手を挫いた夢を見たのである。無論私のまだ行つた事も見た事もない家である。それから私は夢の事も忘れて再び寢入つた。三十分後、弟が不意に歸つて來たので、また眼を醒ました。その時、弟は一大變お待たせしました！ 實は今し方私は、もう少しの處で大怪我をするのでした。舞踏室から出て來る途中、梯子段の一段目から墜ちたのです。」と語つた。」と

彼は今まで幻影などを見た経験は一度もないと言つて居る。

當時彼は熱烈に弟の事を考へてゐたかも知れないが、併し、それは弟からの隔感的の知らせではなくて、寧ろ遠感的の刺激に因て起された心的視覚の様に思はれる。殊にウアバートン氏は煌々と燈の輝いてる舞踏室や、時計や、茶菓のならべてある卓をもはつきり見えたと言つて居る。そして、それが事實とよく一致してゐる所から見ても一層さう考へられるのである。

予は曾てこれによく似た例（梯子段から落ちた話）をランコニー（「未知の世界へ」四二七頁及四八五頁）に發表して置いた。

吾々は尙この心的視覚の珍らしい事實に就て次章に深く研究し、前章よりも更に一層確實な證據を以て心靈の卓越した力の存在を證明しやうと思ふ。

遠感的の視力、隔感的印象は夢中に限らず半睡の状態に於ても同じく現はれる。一八八三年十一月二日、辯護士リチャード、セアール氏は次の觀察を心靈研究會に提出した。

「或る日私は寺院の事務所で書物をして居つた。私の室は一つの窓で、そこに煙突もあつた。窓からは寺院の全部が眺められる。私は不圖、自分の眼と同じ高さにある窓の硝子を通して外を眺めてゐる事に氣が付くと、そこに私の妻の顔と頭とが映つて見えた。彼女は仰向に倒れて眼を閉

ぢ、顔色青ざめて死んだ様になつてゐた。私は思はず慄然として愕いたが、氣を取り直して窓の外を見ると向ふ側の家だけで何も見えなかつた。そこで自分はうとくと眠つたのだと獨りで決めて了つて、眠氣を醒ます爲めに、二、三度室内をぐる／＼廻つて、再び仕事にかゝつた。そして後は何も考へなかつた。

私は例もの時間に家に歸つた。その晩、妻と食事をしてゐる時、妻は今日姪をつれてグルーチエスター、ガードウンの友人を訪ねた事。そして晝食中であつたか、その後であつたか姪は何ういふ機ひか誤つて轉倒して顔を傷け夥しく出血した事、それを見た妻が驚きの餘り氣絶した事で語り出した。それで、私は晝間の夢の事を思ひ出したので、その出来事は何時頃であつたと尋ねると、二時少し過ぎですと答へた。私の幻影を見たのも恰度その時刻であつた。

リチャード、セアール」

この事實を證明する爲めに、倫敦のグロチエスター、ガードウンのボール、ラード氏は次のやうに書いて居る。

「或る日、數人の婦人と子供が私の家で會合つた。セアール夫人は姪のルーシーといふ少女を連れて來た。彼等が騒々しく遊戯をしたり、卓の周りを駆け廻つてゐると、小さなルーシーは椅子

から轉び墜ちて軽い怪我をした。噪ぎの方が大きかったので、セアール夫人は驚いて一時氣を失った。翌日吾々はセアール氏に會つた。彼は前日の午後寺院の事務室で仕事をしてゐた時、鏡を見る様に明瞭に妻が人事不省に陥つた姿を見たと言ふ不思議な印象を受けたと語つた。この幻像は確かに事件の瞬間に來たもので、否む事の出来ない事實である。」

この夫と妻との二人の心の間には瞬間的に相通するものゝあつた事は恐らく疑ふの餘地はあるまゝ。

遠感による十二、十五、二十、五十、百、或は二百哩又はそれ以上の距離を隔てた所で起つた事件の心的視覚は、この問題を研究した人には別に珍奇な現象ではない。

次の例は一九〇一年二月の英國心靈研究會の議事録に載せられたもので、大概の人が知つてゐる程何遍となく引用された事である。(筆者セント、アンドリュース大學のダヴィッド、フレーザー、ハリス氏自身の直語にかゝる)

「二、三年前、急な用事が出來たので、その週の終りに倫敦に歸れなくなつた事があつた。私はマンチエスターで折角の日曜を過すのが厭なので、土曜の午後マトロツチバスに行つて、そこで靜かな休日暮して、月曜日の朝の列車で歸る事にした。

先方へ着くと、私は停車場附近の、家族だけで營つてゐる小さな宿屋に入つた。そして、すぐ茶を命じて、自分は應接間に來てストーブに暖まつた。その日は殊更らに寒い雪空で、寒暖計は零度の遙か下に降つてゐた。

その時、この宿屋の客と云ふのは私一人であつた。私は茶を待つ間、火の前の大きな安樂椅子に氣持よく腰掛けてゐた。邊りはまだ左程暗くもなかつたが、さりとて本を讀める程明るくはなかつた。私は背を窓の方に向けて、何も考へずに、そして自分の現在居る所さへも忘れた程平靜な狀態でゐたのです。その時、何氣なく壁や、其處に掛つてゐる繪を見ると、それが何時しか倫敦の自分の家の前になつた。私の妻が入口の階段に立つて、箒を持った人足と話してゐた。

妻は非常に困惑した様子であつた。私はすぐその男が貧窮してゐるのだなと感じた。私は彼等の話を聞かないが、その不幸な男が妻に助けを乞ふてゐるのだと何物か私に教へた。この時、宿の女中が茶を運んで來たのでこの幻は消えた。けれども私はこの幻影から何やら強い印象を受けた。そして自分の家に屹度こんな事が起つてゐるのだと思つた。そこで妻に宛て、詳しい事を知らす様に、そしてその男を捜し出して出來るだけ助けてやる様にと手紙を書いた。

事實、倫敦の私の家へ年若い少年が訪ねて來て、歩道と階段に積つた雪を掻くから一ペニーを

貰ひたいと下女に申出た。そこへ襦袢を着た見すほらしい男がやつて来て、「どうぞ私にやらして下さいー この子供に一ペニーを恵まれたつて、それで駄菓子を買ふ位なものでせうから全く無駄な事ですー 私はパンを買ふのです、私には家内もあり、四人の子供もあります、それに皆病で寝てゐるのです。食べる物も薪ありません。どうぞ私にやらして下さいー」と哀訴した。下女はこの二人を待たして置いて、妻へその事を告げたので、妻は出て来てこの不幸な男に會つて彼の口からもその貧乏な事情を聞いた。私はこの瞬間の場面を同じ時刻に見たのである。恐らく憐れな男の傷ましい有様が深く妻の心に印象を與へて、それが私に傳へられたものであらう。

妻はその晩自分でこの男の家を訪問して、出来るだけの事をしてやらうと云ふ約束をした。實際、その家族の憐れな有様は全く男の言つた通りであつた。妻は食物や、着物や、薪や、金を出来るだけ助けてやつた。月曜日の朝、私の手紙を見た妻の驚きは言ふまでもない。二、三日の後、私が自分でこの男に會つた。彼は實際私が幻に見た通りの男であつた。それから彼は牛乳配達の仕事を見つけて二週間ばかり私の家の區域に働いて居つた。

「ダヴィッド、フーサー、ハリス」

この實際的觀察は物質的の眼や、網膜や、視神経や、脳などは少しも共通する所のない心靈の力の

存在を絶対に證明するのではないか。此處に作用したものは唯だ精神だけであるまいか。それは遠距離の間に起つた心的相通現象でなくて何んであらう。事實、觀察者は單に場面を見た許りでなく、彼の妻と乞食との話の性質までも會得したからである。

生存者の間の靈的、心的相通の現象は、既に前にも言つた通り屢々聽覺の形をとる事がある。人は音聲又は危急の叫びを聞く。この音聲、叫びは要求、期待、計畫或は遠方からの命令の一種を意味するのであつて、それは是非共應じてやらなければならない重大な知らせである。茲にも、ゴルフのゴネミス伯爵ニコラス博士の経験した顯著な例がある。

「一八六九年には、予は希臘の少佐相當官の軍醫であつたが、陸軍大佐の命令でツアーン島の守備隊附に補せられた。予は赴任の途上、この島の海岸から二時間航路位の距離に近づいた時、予の心の底の方から何遍も伊太利語で、「早く、ボルテラに會へ」といふ聲を聞いた。予は當時健康に何の異状もなかつたので、恐らく聽官の錯覺だとは信じ乍らも、それにしても不思議な事に考へてゐたのである。ボルテラはツアーンに住んでる人で、氏とは十年許り前に一度會つたきりで、予とは親しい知己でもないから、予が故ら氏の事を考へる譯はないのだ。予は同船者と話をしやうと思つて耳を塞いで見ても駄目であつた。その聲は引續いて聞えて来るのである。予が

愈々上陸して、直ぐ旅館に着いて、自分の室でトランクを開けてる間にもこの聲は絶えず予を苦しめてゐた。暫くすると、宿の女中がやつて来て、今、一人の紳士が是非予に會つて話したい事があると言つて戸口に待つて居られると告げた。予は「何といふ名前の方？」と尋ねると、女中は「ボルテルさんと仰しやる方」と答へた。氏は眼に涙を湛へて入つて來た。そして彼の息子が重病に悩んでゐるから一緒に來て診て貰ひたいと言つた。

その息子といふのは五年前から激烈な精神病に罹り、ツァーンテの醫者達から見離された程の患者であつた。予が行つた時は裸で空いた部屋に監禁されてゐた。彼は一たび發作して來ると、口笛を吹く、咆哮する、吠える。その他色々な動物の叫び聲を出すので甚だ物凄く思はれた。時々彼は大蛇の様に胃のあたりで身體を曲げたり、又は恍惚の状態で跪いてゐたり、ある時は妄想で描いた幻像と喧嘩して見たり、時には長い假死の状態に陥る事もある。予がこの部屋の戸を開けた時には、彼は激怒して予に飛び掛つて來たが、予はちつとも動かずに、じつとしてゐて腕で彼を掴へ、暫く彼を見据えてゐる中に彼の眼は段々狂暴性を失つて身體は震へ出し、間もなく床に倒れて眼を閉じた。そこで予は催眠術の按手を施したのであるが、三十分経たない中に彼は全く催眠状態に陥つた。それから續いて二ヶ月半許り治療してやつた。その間予はこの患者から甚

だ興味ある現象を一度ならず経験した。彼は全快して以來まだ再發した事はない。」

一八八五年六月六日附でボルテラ氏から、ゴミネヌ伯爵へ送つた次の書信は、ボルテラ家に起つた前記の事柄を立派に裏書して居る。

「私は長らく代議士をして居りましたが、貴下がツァーンテに着かれるまでは私は少しも貴下を存じませんし、また嘗て貴方から一度も私や私の粹に言葉を掛けられ申した事はありませんでした。事實、貴下が軍醫としてツァーンテにお着になつてから私がお目にかゝつて始めて粹を診て頂く氣になつたのです。

私共は彼の生命の助かつたのは第一は貴下に、第二は催眠術のお蔭と信じて居ります。茲に署名して貴下に満腔の謝意を表します。

署名 人

クリソブレヴリ伯爵デメトリオ、ボルテラ
ローラ、ボルテラ（夫人）

クリソブレヴリ伯爵デイオニジオド、ボルテラ

アナスタチオ、ボルテラ（全快者）

證 人

ウアツサブーロス、ロレンツォ、メルカチ

も一つの遠方で物を聞いた例として、

「ナンシーのバルム博士は胃弱に罹つてゐる。伯爵夫人を診てやつて居た。それは夫人の方から通ふので、博士は一度も夫人を訪ふた事はなかつた。夫人の邸は郊外にあつた。一八九九年の五月十九日、恰度この日の三日前に夫人は博士を訪問したのである。博士が外出先から歸つて控室を通ると、何處からともなく、「あゝ苦しい！ 誰も私を救つて呉れる人はない！」といふ聲が聞えたと思ふと、續いて何か落ちる様な音がした。彼はその聲を夫人のそれと直覺した。尙自分の印象を確める爲めに、家中の者に尋ねて見たが、誰一人夫人を見た者もなければ聲を聞いた者もなかつた。そこで博士は事務室に入つて、務めて自分の思想を統一し、自ら軽い催眠状態に陥つて夫人と會見した。そして夫人の様子や、動作を見た後懇ろに注意を與へた。

後間もなく夫人は本當に博士を訪ねて來た。そして嘗て自分の受けた印象に就て詳しく博士に告げた。それは凡ての點に於て博士の印象と寸分の違ひはなかつた。それから博士は、「貴方が部屋へ歸つてから、何か邊を探して居られた様でしたが、あれは何でした？」と夫人に質ねた。すると彼女は「誰か私を見つめてゐる様な氣がしたからです」と答へた。」

經驗のある觀察者のこの價值ある例に對してブリモー氏は次の如く意見を述べてゐる。

それは確かに悩める者からの以心傳心的の叫び聲であらう。夫人の苦痛から叫ばれた哀訴が受ける者の潜在意識の上に作用して、聽覺の印象に變形されたものと思はれる。バルム博士は自己暗示に依つて自分の知覺の中心を形體化するに充分な催眠状態に身を置いて、その方法に依つて彼の患者の家に心的表現を試みて後彼女に答へたのである。それは夫人が後博士を訪ねて「誰か私を見つめて居る様でしたから」云々と報告した言葉に依つて充分に確められる。即ち一方には思想の傳達——病人から醫者への以心傳心的の作用があり、他方には傳達された思想に答へて、半夢遊状態に在る醫師は、精神を形體化して知覺の中心を患者の邊りに移遊せしめたのであつて、是が即ち靈的遠感作用である。

だが、この移遊と云ふ言葉は果して現象の眞想を正しく言ひ表はしてゐるものであらうか。恐らく心理的組織には、正しく見、或は感ずる爲めに、一點から他の點へ移遊する爲めに距離の存在を必要としまい。けれども、事實は恰も精神が或る距離を移行する様に見えると言へばさうも言へるのである。それは孰れにしても大した相違ではない。如何なる形式に於て解釋しやうとも、それは精神組織に屬する異常な能力の顯著な證據でなくて何んであらうか。

そこで、吾々がこれから考量して見たいと思ふ遠方から聞える聽力——以心傳心的聽力と云ふ事、

若し人が心、精神、或は心的實在（吾々が如何なる語を用ひ様とも）が、肉體や、五官の範圍を超えて働くものであるといふ事を認容しない中は、この聴力も認める譯には行かない事になる。

次の記事はロード、フライエル氏の著書「幻覺」から引用したのである。

「一八七九年の秋、次の不思議な事件が起つた。その頃、私の弟の一人は旅行してゐた。或る日の午後五時半頃、私は明かに自分の名を呼ばれたのを聞いて非常に驚いた。それは確かに弟の聲だと覺つた。家中を捜して見ても彼の姿は見えなかつた。彼は今、四十哩も離れた所に居るのである。自分の呼ばれたと思つたのは屹度錯覺に違ひないと考へたので、後は捜す事も止めて、それつきり弟の事は少しも考へなかつた。六日の後、弟が歸つて來た。彼は「先日汽車から降りる時足を滑らしてブラットフォームの上に叩きつけられた事から、その倒れた瞬間に貴方の名を呼んだのは自分乍ら不思議でならない」と言つた。それで、私は何時頃であつたと聞くと、恰度私が呼ばれたと思つた時間に全く一致してゐたのです。」

予の照會に對してジョンフライエル氏即ちその遭難者から次の様に返事して來た。

『私は一八七九年旅行してゐました。その途中、グロスターに泊る事になつて、同驛に着いて汽車から降りる時、何うした機みか私は倒れたのです。驛夫はすぐ助け起して呉れましたが、彼は

「どこか怪我しませんか？ 誰かお連があるのですか？」と聞くので、私は「否、」と答へました。

そして、「何故君は物好きにそんな事まで聞くのか？」と問ひ返すと、彼は「今、貴方がロードといふ名前を呼ばれたからです」と言ひました。私が家に着いて、その失敗の話をすると、兄は「それは何日の何時頃であつた」と聞くので、停車場に着いた時刻を答へました。すると兄もその時刻に確かに私の聲を聞いた事や、家中を捜した事を申したのです。』

この話の筋合から考へても、この時の暗合は極めて正確なものである。電話の様に空間を通過して行つた聲である。

以上は實に以心傳心的即ち心的傳達の動かす可からざる多くの現象である。此等の現象は吾々が今日まで生理的心理學に依て學んで來たものとは全然異なる超越した精神の力即ち心波に依る遠距離の視力と聴力を示すのである。

予は思想の傳達に就て既に述べ來つた事を故ら茲に反覆したくはない。讀心の事實は已に幾多適切な實驗に依て十二分に證明されてゐる。左に特にメスニー博士から報告された夢遊病の状態に在る患者に於て博士自ら觀察した一つの例がある。

『予が研究中の患者は讀心し得る程に明晰さを加へて來た。そこで、患者の前に十二人の人を立

たせ、心の中に一つ宛の花を任意に考へさせる。そして患者をして其の人々の意中の花の名を言はせた。彼は少しも躊躇せずに間違ひなく言ひ當てた。恰度、人間の腹の中に在る本を読み擧げる様に指摘したのである。」

實際、この種の例は何百とあつて、最早珍らしい事ではなくなつた。

要するに思想の傳達と云ふ事は熱、光、電氣、太陽の磁氣の傳達と同様に確實な事である。

遠感的視力は眼の助けを籍らないで作用するのであつて、距離や、物質的の障礙に依て何等影響を受ける事はない。

それは空間に關係しないと同様に、時間にも無關係である。人は現在、過去、又は未來の事件を見得る。この心靈的事實は肉體の組織とは全く獨立した精神の働きである。

若し或る人が此の豫感や、以心傳心的感覺が肉體とは全然別な精神なるもの、存在を證明して居ると云ふ推論を否定して、これ等は腦に附隨する當り前の作用である。所謂精神などに基づくのではない。それは犬の嗅覺又は傳書鳩の本能と同様、決して精神の獨立存在を立證するものではないと云ふ假説を主張するならば、吾々はその人に向つて事實を虚心坦懷に分析すれば誰でも納得出来る筈であると答へやう。何となれば、それは思想の問題であつて、生理組織の問題でないからである。吾々は

見えざる世界、即ち心靈世界に住んでゐるのである。人々がこれ等の知覺に對して、無意識とか、潜在意識とか、下意識とか、或は其他何と呼ぼうとも、それは大した問題ではない。吾人が茲に感ずるものは作用に現はれた精神の本質である。心靈である。

それは網膜でも、視神經でもない。又使用される腦と交渉あるものでもない。あらゆる腦の作用を想像して見ても、腦の作用では他人の心の中の思想を読む事は出来ない。況んや遠く地球の反對面に起つてゐる事などを感知したり、未だ起らない光景などを見る事は出来ないのである。

然らばこれ等の傳達は彼のエーテル波に依て行はれるのであらうか。若し振動の現象中の光と同様なものに考へ得るとしても、尙光とは著しく異なる點がある、と云ふのは光は距離に依てその度を減少するが思想は同じ強さを以て完全に移送されるからである。そこで思想傳達の媒介物は果して何物であらうか。

近代のエーテル波動の原理は證明された。けれども、昔のニュートンの放射説は完全に反證を擧げられたであらうか。否な、ある放射は明かに認められてゐるではないか。太陽の光線の反撥作用は反て放射説を裏書してゐるではないか。極光はその原が太陽の放射に存してゐるではないか。イオンと電子は空間を横斷して來るではないか。

吾々は次章に於て以心傳心的傳達以外の精神的透視力の絶対に否定出来ない證據に就て研究しやうと思ふ。けれども、多くの場合、以心傳心的現象即ち思想の照應が遠距離透視力と全く關係のないものであらうか、何うかを決めるのは極めて困難な事である。茲に又、多數の例の中に人の死ぬ刹那を視た事實がある。次の手紙は夢の中に彼の父の死を見た事を述べて居る。

『左の事件は貴下の御研究に多少の御参考になると思つたので、二年以來御通信し度いと考へてゐ乍ら、遂その機を失してゐたのです。唯だ私の名前丈を秘して頂きたい。』

一九〇九年の正月、私はヴァンデーのサンマルタン、デ、ノアイエで公證人をしてゐた時であつた。

父母は當時モーティエに住んでゐた。一九〇九年一月九日、私は父母を訪ね、健康上に何の異状もなく、頗る機嫌の良い父母と數時間話し合つて歸宅した。それから、二、三日の後、父からも母からも別々に便りがあつた。その時も何の變りはなかつた。一月三十日の晩、私は父母の家へ出掛けた夢を見た。多くの人が應接間に集まつてゐて、床の上に敷いてある蒲團の上には父が死んで仰臥してゐるのだ。私は泣き出した。傍に寝てゐた妻は目を覺まし、私を起して、何うかしたのかと聞いた。「何んでもないんだ！ 馬鹿氣た夢を見たのだ。親父が死んだ夢を見たのだ！」

と答へた。

それは、まだ朝の五時半であつた。それから又、ぐつすり寢込んで了つた。

翌日、私は父が前夜十一時から發病して朝の五時半に亡くなつた事を始めて知つた。五時半と云へば私が夢魘に襲はれた其の瞬間である。父の家では私が夢で見た通りに、そして應接間に父を横たへて居つたのである。』

この遠距離透視に於て、以心傳心的作用が何れだけ働いてゐるのであらうか。吾々の蒐集した文書に表はれたこの種の證據は實際に數限りなくある。この新しい科學の樹は極めて澤山な枝をさしてゐる。そして其の枝の一つ／＼は特別の研究を要するのである。

大戰の間、軍醫少佐として従軍してゐたジャン博士からリシェット教授の許に通知された七歳の少年の經驗した遠距離透視の話がある。

『十年程前、私は自分の村ヴァールのコゴリスで七歳位の子供の患者を取扱つてゐた。或る朝、子供の家から大急ぎで來て呉れと云ふ使があつたので行つて見ると、子供が突然人事不省になつたのだと言つて母親はおど／＼してゐた所であつた。母親の話に依ると、子供は例もの様に機嫌よく眼を覺まし、別に異狀も見えなかつたが、十時頃、床の上に起き上ると、不思議な幻覺に怖

えた彼は一面に水を見た。そして父が溺れさうになつてゐるから早く助けて呉れと叫んでゐたと云ふ。當時、彼の父はニースに行つて留守であつた。私の着いた時は子供の興奮がすっかり鎮つたが、矢張り父の溺れるのを見たと言つてゐた。

間もなく、その兄弟からの電報で未亡人——事實母親はこの時から未亡人になつた——はニースに急行した。彼女の夫はその弟が水泳中痙攣を起して溺れさうになつたのを救はうとし反て彼が溺死を遂げたのである。それは午前十時頃であつた。彼は最後に「子供等が可哀相だ！」と言ひ残して息を引取つたと云ふ。」

もう一つはヴァール縣に奉職してゐる教師からの報告であるが、彼の希望に依て名前丈は出さない事にした。

「私の親族の一人が、或る朝、突然眼を醒まして自分の側に寝てゐた妻に、「これからすぐ起きて行かなくちやならない！ 泥棒が島に這つて、飲んだり、食つたりしてゐる。」と言つたので、彼女は寧ろ窘めるやうに、「此處からそんな物が見えますか？ 串談でせう！ まあ休んでゐらつしやいよ！」と答へた。けれども彼は確かに見えたと言ひ張つて、鐵砲を持ち出して島へ走つて行つた。艦で島へ侵入した二人の無頼漢を捕へて役場の留置所へ引致して行つた。

一九一二年一月二十三日

ヴァール縣にて

F

言ふ迄もなく泥棒は所有主の事を考へてゐたに違ひないが、まさか捕へられる事はあるまいと思つてたであらう。それは一面に於ては遠感的——以心傳心的作用ではなくて、遠距離透視の例とも見られやう。この事に就ては次章に詳しく取扱ふ事にする。

吾々の中は遠隔的相通現象の觀察は、現代から始められた様に考へてゐる人もあるが、それは全然間違である。一七五二年印刷されたラングレ、ドフレスノイ著の「論議」の第二卷には「夢の中に於て遠く離れた物象が精神と外界の空氣とその親和力に依て吾々の眼の前に現出する。百里を距てた人が、その友人の死を、死の瞬間に知覺した事が屢々ある」と明かに述べてゐる。

この事から吾々はベトラーク其他の觀察家に依て報告された種々の事實は既に十八世紀の或る哲學者に依て、恰も今日吾々が入れるやうに受入れられてあつた事が想像出来るのである。だが、吾々は彼等の解釋をその儘承入れる譯には行かない。それは現代に於ける吾々の解釋の方が幾分彼等の上にある事は言ふまでもないが、さりとて彼等の説にも自から相當の價值を有つて居る。吾々は決してそれまで破棄する様な事はしない。

人は一般に斯かる不思議な例は事實甚だ罕れであつて、その上何れも疑はしくあり、不確實なもの

であると想像してゐる様子である。併しそれは誤りである。予が五十年の生涯の間に以心傳心的事實や、事件の豫知や、死の豫感、又は未來の狀態乃至場面、恚うした現象——一言にして言へば心的作用に就ては少くとも十人に一人は自分自身或は知人から直接に教へられてゐるのである。これをしも率れた事實と言へやうか。けれども、人は兎角この種の事實を隠蔽する傾向がある。如何にも許す可らざる事を瘦す様に努めて外聞に洩すまいとして居る。これは凡て誤つた教育と幻想的な恐怖の結果である。

以心傳心的事實にはより以上の基礎がある。如何なる宗教よりも、もつと普遍的な、鞏固な根底を有つてゐる。吾々がこの基礎の上に研究し來つた心靈上の事實は基督教がその幾多の宗教（新教、舊教、正教）と共に基礎としてゐる事實、或は猶太教、イスラム教、佛教或はその他の宗教の基礎となつてゐる事實よりも一層多く立證され、一層慎重に觀察され、一層完全に論議されてゐるのである。故に眞理を求むる爲めに一面に於ては宗教にその希望を托するものがあると共に、他面には吾々が現に考究してゐる科學的實驗の方法にその希望を繋いでゐる人々があると云ふ事は容易に理解し得る所であらう。

更に一言を附け加へる。光のスペクトル分析が光波に依て眼界から何百萬、何億萬哩離れた天體の

大氣中に存する物質の化學的成分を發見し得ると同様に、心靈放射の分析に依て、いつかは是等遠方の星の世界に住む生物の生命、思想と交通し得る事も不可能であるまいと思ふ。

既に今日に於て、明瞭に證明されたこの極めて遠い距離を隔て、働く精神的暗示に依て思想を通ずると云ふ事實は、ある特に微妙な波に依て一つの天體から、他の天體へと人間の意識を放射させる事が必ずしも不可能ではないと云ふ事を、自ら教へてゐるものでなくして何んであらう。

第七章 眼に依らない視力——遠感的相通現象を除く靈的視力

事件、現象は、それが既に確立された學說を支持する時よりは、寧ろそれを反駁する時に於て最も有用である。

サー、ハンフリー、デーヴィ

思想を遠距離に傳達するのと同様に、言語若くは何等の記號に依らないで意思が作用する事を充分に證明してゐる諸現象は、吾々の内部には必ずや或る精神的存在——思考、意思——があつて、それが吾々の有機的感官の範圍外にまで作用するものであるといふ事を明かに教へてゐるのである。同時に數多の心眼現象も亦、是れまで述べ來つた以心傳心的現象や、思想傳達の作用などとは別に存在してゐる様なものの、矢張り是等の諸現象が互に相關聯して吾人の精神的存在を確實にし、それを補宜してゐる事は言ふまでもない。

この特殊な問題も亦、それ自身頗る豊富であり、又種々な證據に依つて裏書されてゐる。予は數年前からその方面の研究を企てたのであるが、既にそれ丈で優に一卷を成す程の資料が蒐集つた。併し、それは追て發行される機會もあらうが、茲にはその中二三の重要な記録だけを引用するに止める。

この心眼的現象は極めて興味のある、そして確かに精神の未知の能力の一つである。或る人は平常の状態の下に——夢中又は自然的な或は技巧的な夢遊状態ではなく——この現象を見る事がある。併し、特に睡眠の状態に於て多く觀察される。

それは直接であつても、又は頭腦中の思想を通じて、此の遠距離透視の事實は、極めて明白な、そして非物質的な人格的要素が立派に吾々の中に存在する事を立證してゐるものと思はれる。腦が思想を分泌するのだと言ふならばそれは明らかに放誕な言ひ分である。併し腦が思想を送つて他の人の思想を索め、それを註釋し、それを理解せしめるのだと斷言する人があらば、察る亂暴である。それは原因と結果を混同してゐるのである。何故かと言ふと、今まで再三述べた通り、思想は原因であつて、決して結果ではない。それは明かに獨立して活動してゐるからである。

今茲に、科學者を憤らせる言葉があるとすれば、それは必ず「心眼」即ち「眼に由らない視力」、換

言すれば額、耳、腹、指頭、足、膝又は内的視力に依つて、不透明體若くは數百哩を離れた物を透視すると云ふ語であらう。何といふ無思慮な放言であり、矛盾な事であらうと彼等は頭から蔑すに相違ない。然り、額、腹、手足、膝は言ふまでもなく視覺の器官ではない。心の視力は決してそれ等の物を通しては行はれない。見るものは精神である。

不思議な程巧妙に出来てゐる眼の視神經組織が外部の刺激に對して極めて精密に適應する事を知つて居る生理學者は、これ等の映像がこの巧緻な器官なしに知覺し得るとは認めない。この精巧緻密な器械、それは原始地質時代の三葉蟲の極めて幼稚な眼から、人間の眼に至る迄の太古の有機的進化の極致であるに過ぎない。

白狀すると、予は心理學者である幾多の友人に依て既に肯定され、予自身でさへ催眠術者に依て眼の前に多くの實例を見せつけられてゐたにも係らず、久しい間、自ら進んでこの問題を研究する氣にはなれなかつた。殊に天文學者は尙更この種の問題に手を出す事を馬鹿氣た事に考へてゐた。偶ま田舎婦人の夢遊病者を見ても、人を瞞着する手品師と擇ぶ所のないものだと思つてゐた。

而かも、一八九九年予が始めて心靈現象の研究に着手して以來予の從來の考へは大ぶ違つて來た。拙著ランコニー「未知の世界へ」第八章中に掲げた夢中透視の四十九の實例は實にこの現象に向つて

予が裏書したものである。そして予はこの問題に對しては徹頭徹尾自由に、何等先入觀を容れずに研究して來たのである。又、自分が本書に於て「眼なくして見、耳なくして聽く事が出来る」と言明したのは、これらの働きは視覺、聽覺の感受性の過敏なるに依るのではなくて、内的——心的の感覺、精神的感覺である事を實證する幾多の事實があるからである。

遠距離視力と「第二次的」視力とは明かに精神に屬する卓越した能力の證據である。従つて腦の化學的、機械的分子の作用に屬するものではない。

吾々は辭書を開く時、その中に第二次的視力、二重視力、千里眼等の語を散見するが、而もそれ等の現象に無知なる爲め、その語が如何なる意味を示してゐるのか全然分らない事になる。事實吾々が最初持出した凡ての反對論は悉くそれ等の現象を誤解、錯覺、瞞着、詐偽或は單なる思想に歸したのであつた。吾々は眞理の前には男らしく低頭せねばならぬ。そして何處までも光輝ある眞理を追ふて進まなければならない。

予が茲に主張する論題は哲學的見地から見ても重大な事である。何故かと言ふと、その結果はアリストテレスや、ロツクや、コンチャツクその他の感覺論派の誤つた説を矯正する事になるからである。五官を通らないで意識に入るものがない。言葉を換へれば「吾等の意識に存在する凡ての物は吾